



校訂 補缺 異本春兩物語

二卷十篇、白
二篇、缺

特別
イ 4
3159
A17



14
3159
A17

伝多やナシ
樊噲 下

捨石丸

長者長屋

壬申の乱

茶神の物語

新片三枚ノミ

建曆年。光弘三、元中九、享徳元、

永中九、元禄未、

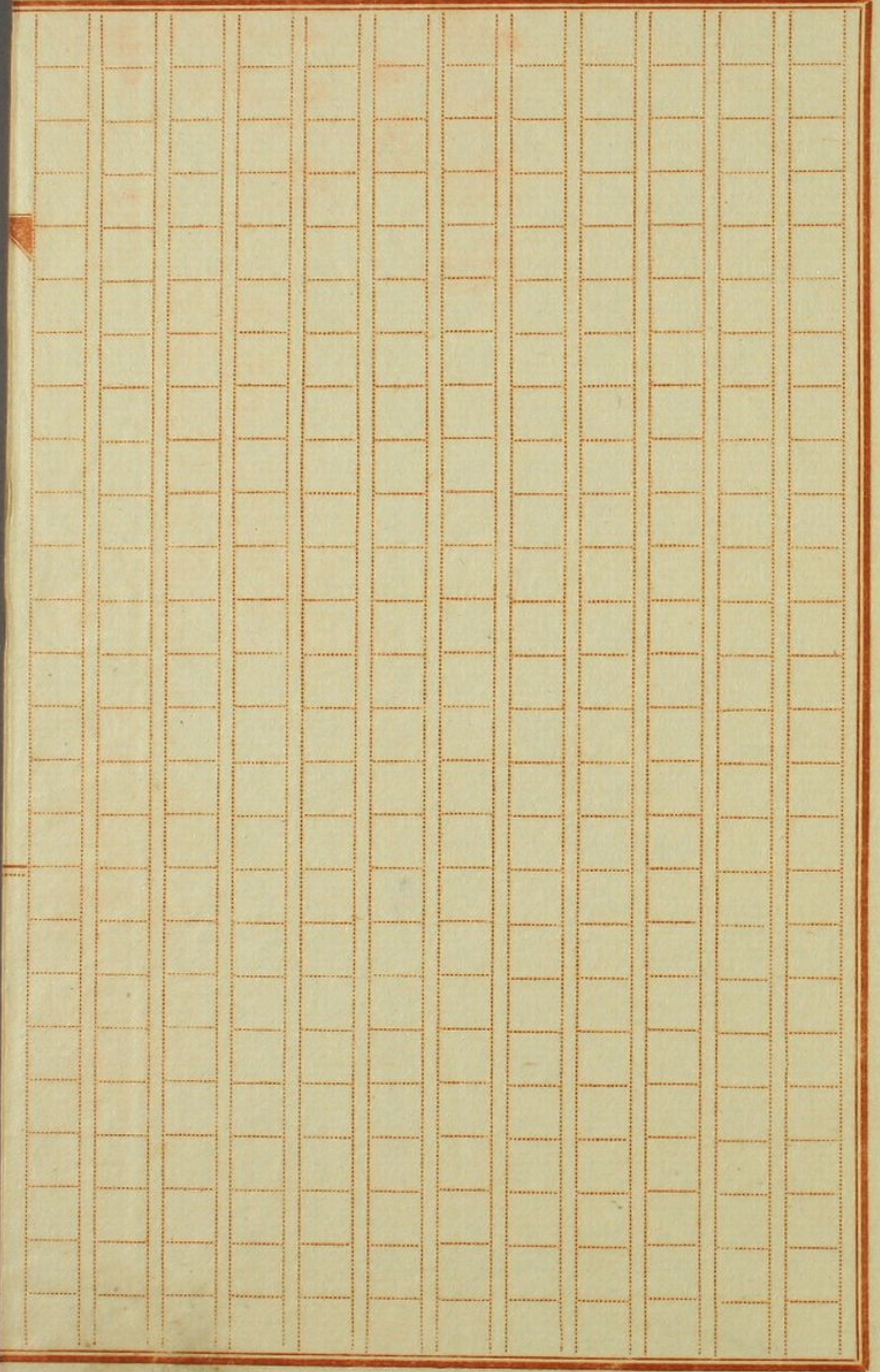
長者物語ハ文字凡布文解

背振翁傳ノ別題ナレシ

ニテ多ク取交する
時ノ作也

以上付後志夫氏ニありと云
大長者長屋(ハ文字を本文解)と
壬申の乱ハ春雨物語中ノものニ非ズ

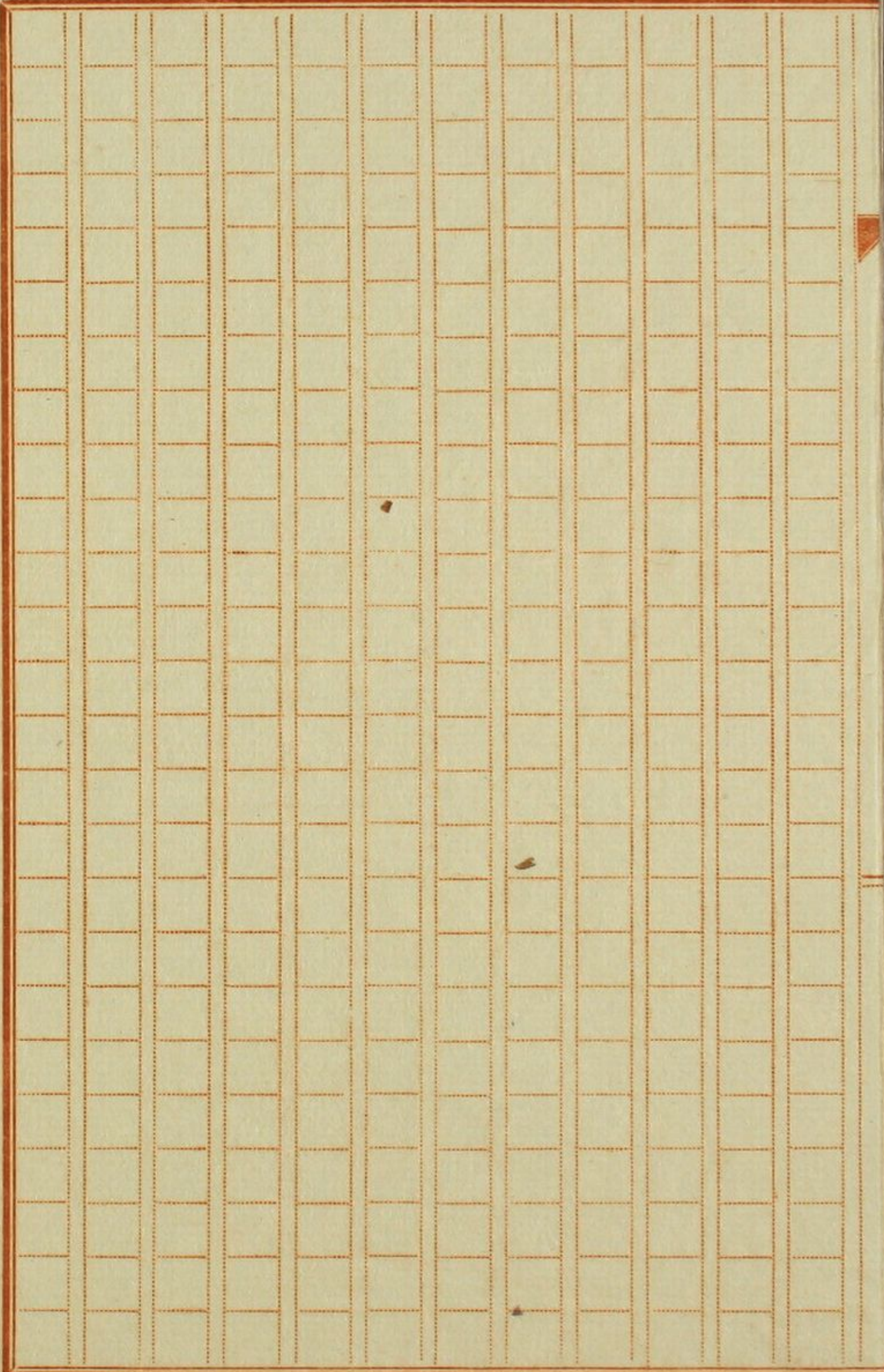
此ノ三部ある物語ニ関係無し



男
こと
寓
言
歌



春雨物かたり
はる雨けふいくかしづかろておもしるれいの筆研とり出
たれと思ぬくらすにいふべき事も無し物かたりさすのま
ぬはうひ事なりさ水とおのか世の山かつめきたれは何
をかかたり出んむかし此頃の事どもく二欺かれしは我
いつけりとなれる乎やし易ことかたりつづけお
しいた、かす人もあるとて物書つくれは猶春をあはふ
るく



春雨ののり目次

一、血切らむら

中村幸彦本

二、天津をまゐ

三、海賊、并識語 富岡本缺く

四、二世の縁 富岡本缺く

五、目ひとりの神

六、死骨の笑顔 富岡本缺 中村本缺 題ますら
を物語 中村本存

七、捨石丸 缺 富岡本^〇缺 中村本存

八、宮木が塚 富岡本缺

九、歌のほめ水 富岡本缺 中村本^〇缺 鴛鴦行

十、樊噲 缺 二回、内富岡本第二回缺 中村本^〇断片

十一、茶神の物語 (背振翁傳) 中村本^〇 遺集上巻 三三五頁 二八〇頁 遺文 三九五頁 二八〇頁

十二、楠公雨袂かたり 中村本



血かたひら 第一回



天のおし國高日子の天皇初より五十一代のたまつり事
まこしめしたまへは五畿七道水旱なく民腹をもちて豊年
うたひ良禽木をえらばす果らひ大回の佳運記傳のけりせ
字をえらひて羨望す登極あらせしほどもなく大弟神野
親王を春の宮つくらして遷させ給ふ是は先帝の御寵愛殊
なりしにすぎりてなりけり。大弟聰明にて和漢の典籍にあた
らせ給ふ君とていにいへり。例^〇る字様はもろこし人の
の推いたるまて乞もて帰りとて。此時唐は憲宗の代に
て徳の鄰に通ひ來たり新羅は哀莊王いたしへのあこめ
て數十艘貢物たてまつる。天皇善柔の御さかすませぬ。

例^〇る字様はもろこし人の

見去告上
工

春の宮にはやうみうらるゆつらまく因らまきとあらせたまふを
大后参議さる事忘はしとて推とくめたいますつる。一夜
夢見給へり先たいのおふん高らかにて。けさの朝け鳴を
る鹿の其聲さきかすいゆわし夜のふけぬとら。打かたふ
きて御歌のころおほしとらせ給へりま。又の夜せん帝の
御使あり早良親王の靈かし原の御墓に参りて罪を謝す。只
おのが後なきさうなへりけきて去ぬとこそ。是はみ心のた
よあきにあた夢とおほしとらせ給へと。宗道天あると尊統
おころせ給ひぬ。法師かんたき等。教壇に昇りて加持参らせ
けらへ申たり。侍臣藤原の仲成いもこの薬子等申す夢に
おのけちめをいふ。よきあまきに教定まらんや。御心の直
きにありき神のよりつくると申て。出雲の廣成におほせて

又薬てしせさせたいすつる。又参議の臣等はかりあはせて
こ、か、この神社大みらの御つわひあり。猶伯耆の國に世
を辞る玄廣をあまの御加持まいらす。此法師は道鏡と同
しとて山深くこ、か、こに行ひたりし。大徳の聖りなり。
七日朝廷に立て妖魔を追やらひし。御心すか、し、し、
ならせたまひぬ。猶やこに在て日ごとまるれとみこと
りせし。かと思ふ心やある。又遠きにかへりぬ。仲成外臣を遠
さけんとはかりてけ、くすり子と心をせなくさうあ奉る。か
らぬ事申すも打急み。是等か心をもとらせ給へ。視ひし。の
御宴琴ふえの歌垣八重めくらせ遊ばせたまふ。御製をうた
ひあくるそのおほん。掉りかはらるる。来なけおく露は

由
あやう、若
やぐ、ま

霜結はぬ、朕あか油なり。御かひらけさうせ給へば、薬子
扇とりて立舞ふ、三輪のとの乃、珠の戸をおく関つすもよ
敷久くと袖翻してことわきたいつる。御ころろすか
しくおひてやうせたまふ。太弟のこ子才學長したまふと忌
て、こそか言あらし奏聞する人あり。又此代子と急く人も
ありとゆふ。こかと獨こちたまふ。皇祖も、長身道ひらか
せ可筋みとこしくと仇をうちたまふ。十嗣の宗神のおん
時近ひくるすま事おかれ、養老の紀もくる所なし。徳道も
たりてさかき教へる。或はあしき事を横め、或はたくみり
枉けては代々榮ゆるまくに静ならず。朕は文も事もとけ
れいたし、直きまは、おほす。一日太虚、雲なく風枝を
鳴きぬ。空物有ととろく言ふ。空海まいりあひて念珠を

飛行機

しすり呪文とさういすむ。ち地もおつ。あや、靈人の車
に乗てそありゆる。とらへて横に納め難波なり。江に捨さす。
齋部の瀧成おちし所の土を三尺穿すと、神やらひをらひ
聲高らかになり。一日皇太弟相原のぬはかに詣てみるかの
奏文申たまへり。何の御ころろとや。誰つたふへきにあら
ぬは知るべきやうなし。
天皇も一日御はかまあり。たまふ。百官百司もさ先きおひ
あせふ。よそなふ。左右の大将中将御ころろのこがさかなた
らう。箭とり志げり。叙はせせてまもりたまへり。百取の机に
幣帛うつまきたつ。こへ。賢木の枝も色こさませせてさり
かけたる。神代の事も思はる。なりけり。雅樂寮の人と立並
てこくさの笛鼓のおとあし。ちと心をす。末のすちらさ

三

へ耳傾けたり。あやしうしろの山より黒き雲きり三昇り
 雨ふらぬとしけの夜の闇に等しいすき鳳輦にて丁等あり
 たとりつぎ左右の大中将もつらに亂してそなへたり。還御
 高らかよ申せは大体の氏人開門す。御つゆまありしと久
 才師等いそぎ参りて御葉をうし奉をかめておぼす御國
 讓りのさかじやとおぼしのとむれい。更し御をやとまし。
 御かまらけまいる。粟栴野の流の小鯉よならむの國の巖と
 りそん。脛や何やすめまつれい。みけしきよくうたつたさ
 舞うたひつこう。夜に月出てほろろきすひとめと聲鳴あこ
 るをきこしめして大とのろもらせ給ひぬ。あした空海まい
 る。問せ給へば三皇五帝いや遠し。ゆのちの物かより
 聞せよとせん。空海申すいつれの國か教へる。聞くべき三

開飲開

天帝我に
たむけし
たむけし
たむけし

陽の網の一陽は我にと云いか。私の始なりた。くく。御心直
 くましますま。くにまつり事聴せたまへ。日出て起日入てふ
 し。飢てららむ。渴していのむ。民の心そ。あさくし。あらんや。は
 打らざるか。せてよし。くとも。みろのらん。太弟参りたま
 へり。御物かより。之の。まはく。周は八百。年漢家。四百年い
 か。たす。水。長かり。や。太弟。こ。給は。く。長。とい。こ。も
 周は七十年にしてや。衰ふ。漢も。高祖の。骨。け。い。ま。冷
 ぬ。呂氏の。亂。お。こ。る。つ。み。の。怠。り。に。も。あ。ら。ぬ。と。天の時
 にかあらん。問せ給ふ。天とは。日。こ。に。照。し。ま。せる。皇。祖。神。の
 御國。なら。す。や。は。か。せ。等。天。と。い。小。事。多。端。なり。又。佛。氏。は。天。帝
 も。道。を。ん。く。問。と。ま。ある。く。天。と。い。小。物。の。愚。なる。は。こ。ろ
 る。得。か。と。と。太。弟。御。さ。へ。な。く。て。ま。か。て。出。給。へ。り。あ。した

私私

児の手栢
はし板
板宇治の橋

御國譲りの宣旨くだる。ふたさきとなりし平城より居させ給へんとぞ。元明より先帝までなく代の宮とこそなりしむかひは宮樓殿堂さく花のにわがごとく今さかり也とよこしをおかし出させてやいそかせたまへりけん。目をえらひていてたうせまへませる。聲馬輿を奈良とぞめさせておけしなすめさせ給ふ。おらん。お出させ給へり。
もかふぶぶこのて板のたひらけくかひてつかへ萬代までた。是をうたもせうた人等。吹しらへ奉す。奈良坂より夕御餉まいる。藤子御といふ。このてか。葉いなさく問せ給ふ。それいねちけ人よこそ直こしきたいのでと申す。よーとみここのらせて古宮に祀り入らせ給ひぬ。あした御簾かけさせて見はるかせ給へは。東は春日高圓三輪

や也欵ヤ欵
不明

山みんがくく。鷹正山をかきりく。西はつらやたかんまいこまふいかみの峰。青幡なせり。出へも。初より宮とくろとえ。ひきま給ふを先帝のいのさふよ。あさばかといひ。りこちせぬ。北元明元正聖武の御はか立ならふと。やかくてさる。伏拝させたまふ。大寺の礎たのく。雁塔敷をかすろへさせぬ。城市の家とも。いも。今の帝都よりつりもてぬ。ふせとも。あらる。東大寺の毘盧舎那佛鉢まんと。いさき出させ給ふ。見上させて思ふ。過しみか。ちや。西の果ての國よりわねて。この陸奥山の黄金花。光り入させと。御戲の。あか。ちかく。あさる。法師の申す。是は華嚴と申御経との。あせ。み。ちなり。如来のへんく。急大いあせ。は。虚空を。は。ひ。ち。あ。て。は。芥子の

中へ所えさせしと申す。あつと肯儀はこゝにもあつた
の中へ御ありのうらまは元ノ年を鑑らせし。か竺國にて三
しとの御ありのち也。五尺のあつて。過させし。もとをちか
い。いまつるとや。露うたを給けぬ御わんし。さうも御鳥
帽子。あけさせ給ふ。かく直。さうもせらる。華子仲成等あ
しく。このめんと。守る。さうも。い。御臺まいる。いと。さう
き。う。あ。て。難波とや。のち。う。て。あ。か。物。う。あ。さ。さ。
葉子申す。は。は。宮。古。あ。ら。せ。り。み。さ。う。て。御。ち。高。弟。又
こそ。わ。き。て。い。つ。う。あ。せ。し。う。は。神。さ。り。給。ふ。後。の。御。お。と。う。
との。宣。ま。し。御。ら。ら。若。あ。ら。せ。し。と。あり。し。を。宇。治。の。み。こ。兄。は。
こ。ゆ。ら。こ。あ。や。あ。ら。せ。て。三。歳。も。て。ゆ。つ。り。か。り。給。へ。ば。な
に。波。の。雲。が。首。の。真。魚。い。つ。れ。も。と。奉。り。た。ま。ひ。て。海。へ。な。れ。や

悲、悲、悲、
秋、秋、秋

その物う。と。い。さ。へ。さ。う。な。け。さ。し。が。遂。に。免。道。の
こ。子。自。た。ま。り。と。ま。ひ。し。い。う。へ。も。も。あ。ら。し。も。ま。た
あ。つ。な。き。聖。王。と。か。う。り。つ。へ。め。る。あ。つ。か。甲。と。せ。ま。て。下。居
さ。せ。し。は。御。心。の。通。ま。か。り。の。と。を。や。ま。也。あ。つ。ら。は。と。即。高
き。又。昇。ら。せ。し。人。の。嘉。也。御。さ。う。あ。か。れ。り。も。ら。う。の。あ。い
お。み。せ。か。く。この。雙。ひ。の。あ。き。と。あ。し。を。た。め。し。と。て
御。ら。ら。し。の。登。ら。せ。し。や。あ。あ。悲。難。波。の。帝。の。あ。し。と。あ。へ
させ。今。一。度。と。ひ。の。宮。ま。た。せ。給。へ。百。官。百。司。民。の。心。も
志。あ。ら。ば。や。と。ぬ。ら。し。と。同。太。弟。の。あ。ら。あ。ら。し。と。は。う。ら。し。と。ち
て。お。つ。り。こ。と。お。ま。し。く。こ。ら。く。し。と。て。せ。い。この。あ。い
う。ま。な。け。と。も。い。う。さ。一。度。の。宣。旨。を。あ。ら。す。り。と。あ。ん。中
つ。ら。ひ。あ。ら。せ。し。仲。成。つ。ら。ふ。あ。つ。ら。ん。と。す。う。ら。ま。さ。さ。る。直

仍
朝歌
都

きよは又是より桂ら水で奈良の宮つりへする臣等にもかり
問すれ、誰御らと申人もあらず仲成兵衛のあまなれ
此そをへし昆明池よりならひてさほはは我ひならはせし
は都小志の事とはやと告て又市所のある歌よ
先はみかき先笑うらん雲の北窗心とぞおしむ
いり、あらううせ給ひて奈良の近臣をめき水推問をい
へは是葉子仲成よりおしりこの春二月のついで何たれ
いよこすすりまいつらす藤藤びやく散らつりて度障
んたいあらうすいなりやいはいは問せたまふ葉子が
申あやし其峭壁をさげさせ給ふまきき奈良坂たいてか
まらうあま青垣めりてあつこの此みうまの内こころと
くは貢もの奉らふ遊しりくさあはらく涙を袖よつ

色

↑とて

満
葱
を

て立さる時御まへに在て聞と申す。さらいとて即官兵を
遣のされ仲成をとへて首割させくすり子の家よりさ
せてこあしをす。又御子の高丘親王の今の帝の上皇の御
ころろりておしひの君と定まりをも停めて備なれ
と宣旨くるる親王改名真如と申三論を道論まひ真言
の密旨を空海に授けり猶更あらばやとて貞観三年の唐王
にあたり行の者嶺をこそと羅越といふ國より御心
くまに問學をせしむり。このみこ天のしたあ
しめきほと上下の人皆申あがりき。葉子のあのか罪は悔
まて怨氣は起らるもえのかりついで又もふして死ぬ。こ
の血帳かすひらる飛走りてぬれくとかりつたけき若
ものらうらに射れとびひらす。又もくはせりて鉄くさる

ける。とぞん。上皇の御心もいふ。志ろしめさ。御代御志。臣等
 みごとのらす。上皇あやまりつと。御心しおろし。より御
 よりひ五十歳。あらせ。とぞん。いひつ。へる。

天津よもの 第二回

嵯峨のむらの英才君とて。御代御志。給ひて萬機を。ろろの。い。と。學を。せ。お。より。て。歌
 も。女。を。か。ら。う。ま。に。の。こ。う。つ。く。皇。女。と。申。せ。も。本。も。あ
 ら。ず。草。も。あ。る。ぬ。竹。の。も。れ。又。毛。を。ふ。き。疵。を。も。と。む。な。ら。に
 つ。き。こ。は。く。く。て。國。ふ。り。の。歌。を。お。く。は。お。の。つ。ら。ら。心。ま
 け。て。石。と。ろ。く。行。め。り。平。の。上。皇。と。つ。り。せ。ま。て。取。り。あ。さ
 せ。い。を。大。く。は。取。か。し。お。わ。し。と。て。う。む。ち。お。わ。り。り。の
 と。清。く。し。ら。る。し。い。お。ひ。て。後。い。い。と。静。ま。行。を。給。ぬ。嵯。峨。の
 み。の。と。も。お。し。や。ら。せ。て。御。代。の。女。伴。を。皇。女。と。な。し。給。ひ
 て。な。く。さ。あ。給。へ。る。是。い。た。し。と。き。御。心。と。ぞん。申。す。を。御

聖岩真
戸部岩
空の神

位あり有りて嵯峨と云山陰より下り居の宮茅茨きらすのた
めし又いとありしうらとわき作りけしけりけりうら
せ給ふ是の先といひの平城なる代の結構この邦はたあ
しあゆみしとていひのまきとて瑞ききの宮あり垣の宮こ
へきせしとていひ。き水と長風いありに被し王臣等家
その煩ふ民いしとていひ。是のあやかりしとて今のたひら
の地をひらきなりて高岩戸豊いしとて神にぬき
ことうけひて遷らせし人の心と記しぬきさゆくもの
みそいつし王臣の願ふありに又殿堂も大の奈良の古
きたかへきせ給ふをたると物知の曾願が三代の物なり
賢臣ともいひしとていひ。なるいまもなりけり漢書の其
あよりいひていひ。そくせりとなん。上皇の下居の宮もあ

かゝる記やき給へるまことにとも申す字様をとも得給ひて
おろく海船のよりに求め撰むせ大の御心ゆくあり空
海もよく手書と友とて法務の外にも度々参らせ給ふ是
近き須得しり義之の真蹟ありよく見がとて取下させし
い見ありしとて申是れ海彼の王に在て手書し跡也志
と見たまんとて裏をかしてけしの方見せしひありる日
本釋空海と記しおまくり。上皇御言なくと姫ませたまふ
とて海もおろしとる。此法師の手ありしとて様と書てあり
しかは五筆和尚の名をなん世つとていひける皇太子受
禪後淳和天皇と申奉りぬ元を天長と改させたまふ
平の上皇此秋七月は神のり給へる平城の天皇と尊崇
し奉る。嵯峨の上皇識度のひらきまに萬機を親し下せ

石換。有
駿志。有

あつらふ
了俗り
わがくす
そ意を明

しかばこのみでの改る事なくして法令正しく上下おつ
もりて儒教もどらなりてべと佛法は益さるりに君のうへ
の御佛と尊稱すべし堂塔より日月の建ならひ博文有駿の
僧等つこきく同しく立ならひて朝政をも時こたわめて
我道のつめに引入る君と申せとも冥福よこ心このみは
とり用ひさする事わづらふ是や如来の大智の網よ
こめられしすと物しりはみそか言申すそれか申す中納言
和氣の清丸の高立山の神願寺はよりは妖僧道鏡が心よた
のひて宇佐の神勅を矯すあるらざるを奏し申せしは妖
僧のうりて了るひの因幡の員外の介は是れ又庶人よく
たしとるちて邦の果なる大隅の流しやる。このめ忠誠のち
り言御代守らせたまへ守作りて御徳報し奉らんといの

あつらふ
俗し

りしかば道鏡追放されぬ。この丸の忠誠天の下にあらぬ人
あらすされと官いたるからすて了るひも本國の備前守に
任せられて國の利利水地あり事なと思へは大臣を問は
あらせしまふとも能無きとついに五十踰て中納言とと
まらぬ神の守りも佛のちりひも身のちりひの命ろく
とり云ふい過ましき。寺の後神護寺と改らる。宗の祥か
ん眞ことなりき。今上の皇太子正良もろとなく御らひ譲
らせ下居させ給ふ此代のためしはれいな事おしに
て文史のつりさ筆さかから國うひき得らる上皇二人
てあらせむるを珍しきよりなり。このつきの帝の仁
明天皇と後尊統とある。紀元承和とあらる。めをた
まふ。た。佛もつる。中納言の代と。榮ゆら。儒教を申すと

三

式或類
考フシ

と給ふも御さへお祀のさうえとてまことありあらや水
げ也けり。さうと皇帝の祀としを平々と志すまい志のまを
て表は打しつらうせしと。良峰の宗貞と云六位の下ら
う人を明くお召おつとせて女おさせりともみそらうと聞せ
給ふ。宗貞とて或いはらぬ中も是はさあはるは是は
是は怨水とけいふと御心悩ませよくつひんあつたり。
志すは色好む御本しやうとて是いつつあせ給へと宗貞
おろちりて年毎の豊のありの舞姫昔まよひ原の天皇の
吉野は世子さけらるる時御らるる志らすへき吉瑞は其
瑞雲を袖とる也して天つまとあら五人舞しあしを
おれさせし也。二人の舞姫の其例たるへりと申てのろこ
のあせるをけりして御目なくさまぜんとす。此事宜旨た

五
早

りて一新帝のころりて大匠納言参議の人と御出するあ
ち花をそのせいのをましてあり御目とあらとやとね
あふとまふふありとらた人めしてなうとせりま敷きをり
ていことくにおりしとむべくとあら中めさけりか
何せのいつきのあしよなすうて帳内よりつらうとす
あしかりき。國あまのうこの帝の時とまさせしは宗貞
上すまで有けり。あつしとて帝歌とまけりておあせてこ
遊ひせきを給へり。やまと歌つひちから歌りけおふは
しあしむむくつらうしと。この御代も興りて女のつらうは小
所しつらうとらふんやの康高等つらうとす。おあたり
地帝への所は興福寺の僧らといあつりし長歌を御覽
して此ふりの僧家とす。あつりしとてはめとせし。其

天律

四

あかしら
て
し
し
り
そ
は
ね

た正こそ長はつれいと拙きをもへすあらばせしみの
ありよむ人絶てなりしよこそいしへの人丸ある人境
良等々我らに不りせあり直しく又思ふことくまなく
云つらねらるるをいあしきしありは宗身ふらあねお不
せうとやなりし。或時空海ありはり。何き給ふの飲
明推古の御時より經典し。ま。い。あ。り。し。こ。も。猶。と。り。
何のの整書のころありき。い。ひ。り。し。似。たり。我。呪。文。の。黄。帝。人
參大董附子の功は同くして何きたらへて。い。病。を。去。り
いのち長からしむ奇薬也と奏す。海に經典を博く志するも
みするそいし。へ。す。り。た。く。し。ひ。を。法。師。と。お。ほ。し。り。宗
貞好む心をみよと何らそ。給ふは。し。の。方。の。す。く。水。の。因

よまぬつきて女房のさひ。い。れ。し。在。た。せ。る。姿。よ。つ。し
給へるをゆめきとて袖をひり。御名のうま。同へとこ
たへなりし。か。山。吹。の。花。色。こ。も。ぬ。し。や。誰。と。い。と。こ。
へ。す。に。あ。り。し。て。帝。蓋。を。る。き。ぬ。ら。り。き。て。着。給。へ。い。よ。ん
即きぬめきやらさし。こ。も。ま。と。ひ。て。走。り。て。に。く。る。さ。へ。ゆ。る
させしとぞ。桃の實はくひき。奉。り。し。に。た。く。て。内。ふ。ふ。め
くつらん。あ。り。る。人。と。は。う。ら。や。こ。い。ま。へ。り。山。吹。と。梔。子。と。は
同じ色なり。と。と。な。る。を。此。歌。よ。め。て。た。ら。ひ。と。つ。色。を。な
んりし。め。り。き。又。淳。和。の。こ。う。の。皇。后。橘。の。嘉。智。子。今。は。太
后。よ。て。在。せ。る。か。橘。の。氏。此。神。あ。つ。る。を。圓。提。寺。と。行。な。り。ん
と申す。此。神。い。ち。と。や。あり。て。帝。に。託。宣。あり。し。と。宣。人。り。奏。と
我。今。天。子。の。外。家。の。氏。祖。なり。し。も。國。家。の。大。幣。を。得。へ。く。も。あ

天律
五

ら中と帝をさとしめしむひこくとおそるくし御心もあら
ぬ子いとして宮を修葺し給ひ大社の敷まつらぬとあるをい
へ太后のたよりし神道の遠し人道の遠しとて是の由りさ
せしと御心かりにあらざりし葛野川のべに今の梅の
宮の祭祀も水やすべて何事も太后のすくすくし御父清友
さしつひ心あるいとむい一つよりものいおそる御父清友
公を贈大政大臣と仰つきたる少帝又母と絶つり遣唐
使おありしとせ藤原の常嗣とてひつらんもつるかく
軍中よりくわらせしもの子もやひとる人あるありまた
伴の健宗權の逸勢等嵯峨のころこの諫諍の事つしを
りしと及逆企しと阿保親王のいうと少志ありしめしけん
官兵より母を給ひて忽しとらへられぬ太子に此事のぬし

よいつもり水しあに落髪し給ひて名を恒寂と申給へり何
と廢皇受禪のよからぬしあに衣さよの習ひの毒液也此
ころと嘉祥三年に崩御あらきうは御陵墓を紀伊の郡深
草山よつうせ給へりまよて深草の帝とせよあめたいま
つりぬしはしつりの夜よりも宗貞行へなく失ぬ是は太后
大臣とちよにくまれとてまつるおそれるるし殉死とり
云ふありまたとあらうがしりと寵恩身よああらふいす
べきとく人の申す衣一重よこの笠かふりてさかす
きやうしありまひを一夜清水寺におこすひし山所も今
宵さなりに旅ぬし七ねんトあらすに經もむ聲の凡ならぬ
を瀧とむぬ自とおしけりて歌をうらてせよせやる
石のうつし旅ぬすすれ肌をさる衣を我にかさ

なん。さて行ふ所。つこくに在るよと。おしゑりて墨つゝり。
筆さし入。此紙のうらうら書付。つらう。

世をすく。辯の衣いし。いひとへかきぬかうすし。
いさ二人ぬん。さて即。逃かされて跡を見せずと。かんの
くしある地。わと。五条の皇太后のみり。の帝か。への
ものどとて。さめ。もとのさせ給へる。御あまの内。つ國。
さあまひし。うは。ついで見顯。つら。てあ。つひ内。ま。いりす。
遍昭とあら。つめて。僧正位。つ昇。つ。ま。あ。く。年。ち。の。き。す。行
の徳。ま。い。あら。つ。て。冥福の人。なり。け。す。その。こ。子。二。人。有。兄。の。弘
延。い。み。ま。つ。か。へ。つ。て。そ。有。る。弟。は。法師の子。は。わ。く。し。も
ひ。き。と。て。髪。お。ら。さ。せ。素。性。と。名。を。改。む。心。ざ。り。此。入。道。よ。あ
ら。き。り。し。お。は。親。の。お。め。れ。は。父。よ。お。と。ら。ぬ。と。時。よ。う。ら。ぬ

うき世心のありしと。多し。僧正。花山と云所。よ。幸。つ。て。お。こ
ろ。い。う。り。ひ。る。佛。の。道。こ。う。い。と。あ。く。し。あ。や。し。世。を。捨。り。
と。あ。め。の。心。は。似。す。て。毛。お。き。衣。お。ら。錦。の。ひ。を。か。け。て。内。
車。よ。せ。て。出。入。す。る。よ。か。よ。く。も。く。の。が。あ。し。お。ま。て。票。
得。る。此。の。が。さ。ち。く。に。こ。う。と。人。も。中。に。あ。る。と。い。ふ。ま。あ。
漸。む。が。あ。ら。し。か。思。さ。れ。ぬ。らん。か。し。
(終り)

海賊

第三回

承和三年

紀の朝臣つらゆき土佐の守に任てて、十二月その日の都
 におもひ参り給ふ。國人の志を以て、けりしかぎりはなごり
 を以て、むすぶは昔より、海にわたり、父母の如き位
 子のさあし、ておひなはく、出舟のせらむる、かしこにお
 ひ来て、酒をきき、のさげきて、歌あり、おはすべくす。船風は
 したかとすして、思の外より、かこよ、さあすす、あはれ、
 かいそく、うらみあり、もそ、追くと、いふ。安ん心、こころ、なれ、
 だく、さ、いら、かよ、み、おこ、と、朝ゆふ、海の神、な、た、い
 まつり、つ、つ、あ、の、底、を、伏、し、拜、し、く、す、い、つ、こ、の、國、ま、て、と
 舟長の教へ、い、の、なる、所、なり、とも、なる、時、の、あ、ら、ぬ、を、い、
 海賊

故さうしものこころふありなきものいとほしゆれにや
うしきの國といつこのさうひなる何の浦と云ふれ
しき事限なり。こゝに釣ふぬやとおほしき智あまをせし
舟のこゝろおておの来しと聲ひけりておとくしき舟の船
立ちたりけりて呼ぶ是の前の土佐守との舟がいきりか
こすすとて國たせし追へ水と舟ちのさうに風波
さへら水やふ今日もぬぬと云ふはひびそくと人の驚か
せしはあらずとて心おちるる舟指させ申給へいと
あやも老いしうらんと申すと申すまはとつてぬふ
なやあつた出給ひなす此男とををといやくししく問た
てられたすまひといつら言也あおきともへさしてはありそ
の浪の聲と取らるへしゆるさせすとて翅あるやうに飛う

悲^つの謀
りナレベシ

つりて御前といとまうらうけ也舟の人と悲心て立ちくと
らる報にこけしきよくて八重なる風と追水とて
来らる志まこと有とてよくし給へぬの雲なりぬの帯
し叙の廣又といめしきまこと海をくのちひせさる
よと見給へど仇あるべきはおほきぬえおゆるむと相むか
ひ給ふ君か國と五とせおのすほといあやしらぬすこいあ
りまてつら紫山陽の道の海へとさあまひと都といよ
すへけるましく考りかしく又せしせとやぬいりん心は
無く聞せ給へち此^真なめしき勅旨をなすりて殿ぶりの
歌えらひて奉る四人か中より君こそ長とりし續萬葉集の
い群の昔のくれり集もいしらぬよつかるなるべし是は
うし心の心をまけの萬の多數の義業とは劉熙か釋名

ば脱飲

ナレベシ

天皇按
悲(キヒ)音
通(キヒ)音
ラかんひと訓
ニナド同例

同歌、
は使

歌は何やいふ心人の聲なるや草木の柯葉といふと云
て何のこころぞとがめはことありゆきあらず人の聲の
怒哀樂をつきて渾まらうこふつし悲しむべしと云ふ聲は
は緩急なるもありてこふふしあらず草木のえさも
もやちの風とて袖に入んやはさるる柯葉とのこひひてう
よはたふふあらずふその多くあらずぬを拙きた偽つ
そかし詳慎が説文の歌は吟也と云是辭典も歌は永言也
といひしを一字につめし後漢の人の吟しきにかくあつれ
てよきも渾中かや文字の葉なり一世の釋名の誤を字と
て葉を歌としてやまうは一つ心をなぬくして萬のこ
このことなれりといひのよやく字をうくるも歌は上
也と名をさこえて心よよこの葉と云語汝ら出て木の

世つてへ習ふい罪あるをわし又唐土の六義といふ事
は是も譌妄よてもありとも三體三義なるをへあらず
おのれいつたりて己の歌なる若そ汝らいつひは又それ
もも非そへともいふをへんやうとてうとてうとてうと
くといひる拙しをわてわらの歌もかくる者へきとか
しとてあぬ氣といひるかにくしとて勅旨とえふ
若く大徳の令らひて良媒なく又人のつまは心めり世
しと歌うとて奉りいはいのよ君明王とてありうは重
く罪ゆるびるへし其歌をも多きにありて意の部五卷
とあては心のうまかぎりなり婦孺のあ神代の昔は情の
こをこころとて其歌いとわの人の代と歌系を儒教お
たりてい夫婦別有同姓をめとるやと云ふ習ふれいころに

海賦

三。参高
ク用ヒタルカ
正。西ノ誤
リ九ニシ

も何一からぬ法とて用ひらる也。かく國の令法よりむき
ても志のひよ心のはするありなまは神代なまの人の
心なるをいのみせん。何はしてえひひの兼向事とも
かへるや。きく朝廷の興師ありと。其の任ならぬ。その
月つらひて何るや。又にくし中よりすれて管相公ありはに
くもねみみてついで外藩の賤され。怒りの神となりて朝
いし水の今更部と尊帝と。其を君の代を延喜の聖代
とはあまりに過るり。三善の清行さういさ。かあまたのへ
すしそつらふまのるをい。三議式部卿とてすまや。是ら
奉りし意見十二事に。齊明天皇三征の時吉備の國までいた
りて人煙にきはくしきを見ふなはして。いく里つらるるに
かゝる又幾万のくすむと。さへせし國人うらふ一里とて

侍りも一里人を召ならし。二万人のたてあつらん。と云はる
二万の里とよぶべき勅旨ありし所。今の北とらへし。て
軍役めすと。もく無しとて。第一よりん。き養せし。の學師の心
せさき也。榮枯地と。かふる。多人の利益つと。むあつきて。罪な
し。さては。二万の軍人の。めさば。いつこ。りか。奉らん。又學文
は。君大臣の。御つと。め。し。て。翰林の。士名。高く。とも。す。む。べ
から。す。つ。れ。い。量。形。の。か。ん。た。ち。女。は。け。め。智。り。せ。い。ま。り。ん
の。為。ふ。し。か。志。し。を。朝。廷。よ。さ。り。ん。な。ら。は。坎。壇。の。府。餼。餒。の。舍
と。お。と。ろ。ふ。べき。者。多。是。元。學。師。の。病。論。説。り。又。播。磨。の。い
ろ。も。野。の。魚。往。の。泊。は。行。甚。ら。此。あ。り。に。身。煩。つ。り。と。て。造。り
し。は。僧。家。の。願。心。なり。天。造。よ。あ。ら。た。る。庭。に。願。れ。て。舟。よ。せ。か
た。し。三。善。か。願。ひ。い。慇。懃。の。心。を。り。り。と。て。聖。道。の。い。あ。ら。す。か

海成

四

くおろくなりといへども父も博く事を知て問せ給はず鹽
梅の旨とも後には成ぬべし我の詩つくらず歌ふも思
ふ不とりて人よぬさあれ且酒の氣て罪加ふふり追やられ
しのちの力量あるをこのさて海よりさむ賊をなし人の實
を我たすらるるおのひのあつに酒のこ肉の飽てかくてあ
は百歳のよひひ得つてし歌りて道とのくしる友はあ
らす問へ猶いそん咽かえき若しゆれの上むべし酒ふるま
へとて乞ふ者物へて出すあくまでくらひのこ興つきて
かへらんとしておのり舟の死のりてやんと目出さめと船
たつとてうたふつらゆきの舟も汝かへりしとていふ
ろしと舟子等ういひつる彼れいさくか舟のともやも潜
かへり跡しらなるとるなりにはけり。貴之都にかへりた

此漢時文
秋成遺文
菅相公論
ト題テ載ス
(四九七頁)各
(三篇ヲ指ス)
異同ヲ
吉

あひて後誰とも志らぬもの文もて来り開き又れと
菅相公の論一章かひそくとしちて贈たる手鬼こし
く清からすしとていふことし
慙哉菅公生而得人望死而耀神
威自昔不幸小人有榮而有子無榮
而有不幸小人有榮而有子無榮
公獨有德而不免不幸貶于西
邊然有故哉自出翰林昇槐位者
黃備公其公二人耳古備者妖僧
擅朝政能忍昔者持大器不傾典
勃平同功也公昔者不然而為朝志
打管根之辱於朝結其寃又三

善清行文才忠心有舉用未試則
 朝而不答是父是善之門弟子後
 去屬它以此遺恨不薦者俗意耳
 清行革命之表次諫公來年革命
 是以學射市雖不識公忠誠而不
 游其學則待天壽乎公忠誠而不
 納其綱年正月為壽乎公忠誠而不
 美玉小瑕身然生而得人財黜是哉
 耀神威自古公一人已
 筆つまほしいまなり又副書して云さきにいふことを
 にあかすして遺つ汝の名は以一貫之と云語をとりた
 るのよりさていつらぬことか起し之の助音こくに意な

富岡本此
識語無シ

之の字ゆきとあさし三百篇よとこり見ゆれとこの
 語の例よあらず汝歌よくよむ予く教しり軽く止て窓下
 のとより大かけて文かあ名い父のあへ若ういふ父不
 文の誅りにあつんは不孝也と書すめて木工頭との書
 つつめりこの後又學文の友よあひて問されいられは不
 人屋の秋津あるいし學問このいふと放蕩して且酒を
 こいふ大臣の言をいか海賊となりて縦横するよ樂農
 か天禄ならめとかりりとも我欺きをつへて又人を
 あさむく也

(海賊 終)

此話一宵不寐ふくもして燈下筆けらしは
 育書なりか心入心してよ

古昔部 攝津より 山城無
 山海經海 第十一 危
 之注参照 スベシ 曰ク
 魏時有人 發故周王
 冢者得 殉女子不
 死不生數 日時有氣
 數月而解

二世の縁 第四回

山城の高槻の樹の葉敷はるる山里いとさびしくいとさう
 し古昔部と云所に年を久しく住ふりたる農家あり山田あ
 またぬしつきて年の豊凶にもちけかず家ゆたかにて常に
 文がむ事をつとめ友をもとめす夜ふ窓のともし火かけ
 て遊ぶ母なる人のいさ寐すや鐘はとく鳴たり夜中過てふ
 こ見れい心つかれついで病を由ふ我父のたまへりし
 を聞知たり好たる事にはいつからは思たらぬと諫られ
 ていとかこしけなく亥過ては枕にゆるを大事としけり雨
 ふりてあひの洞も物のおとせすこもひは御いさめあやま
 ちて丑にや威ぬらん雨止て風ふかす月出て窓あかりし一



語狀如世
 許人送詣
 京師郭
 太后愛養
 之恒在左
 右十餘年
 太后前此
 女哀思哭
 泣年餘
 而死焉

こともあるやと墨すり筆とりてこりひのあひれやう一
 二句思ひりて打かふふきをるに虫のぬとのこ聞つるに時
 こかぬの音夜毎りと今やうし思なりやあや。庭におり
 をちこち見ぬらうにこりそと思ふ所は常に草も刈けらば
 ぬ隈の石に下りて聞さるめとりあした男とも呼てこりは
 れとて堀ち三尺はかり過て大なる石にあたりて是を居れ
 は又石のふたしたる棺あり蓋取やらせて内をうられは物
 有てそれか手に鉦を時と打也とこる人のやうにもあらず
 から鮭と云魚のやうに猶瘦こしたり髪は膝までおひ過
 了を取出すするにたうかろくてきこかけり思はずと男
 等云かくとりあつか小あいたり鉦打手はかりは髪らす
 是は佛の教へる禪定と云事して後の世たふとからんと思

証

定か
 下ぎ
 タキトコナリ

入るる行ひなり。吾こくにすむ事凡十代かれり若にこそ
 あらめ魂は願のまにやとりて魂めかくてあるか手動ま
 たるいと執ぬしとまわかくお水おこちかつらせんとて
 内にかき入させ物の隅に食付針とてあさるか物折か
 つ可せ唇吻とさきく湯水すいれやうく是を吸やうや
 こりこりして女わうていおそろりて立りすこつ
 からは是を大事すれば母刀自も水そくく度お念仏て急ら
 す五十日けうり立てこりかこり多度ひあさか又さへ
 成たるたれはよとていお心とせし又目を潤きたりされ
 と物ささくとい見えぬあまへ。飯の湯うすき粥をどそ
 くま入れい舌吐て味をふほと何の事もある人や肌膚
 とりのひて手足ささき車と潤ゆるや風さむきや赤

二世の家

二

見る。見て
トアリタシ

何れかを遣ふと見え、古き綿衣打きせぬが、自らて敷くうれ
しけなり。物もよくひつまき、法師なりとて、魚いくりせん
かれい却て不しけりすと見て、あへつれい首まで喰つく
すやそよごちめへりし、水は事問す水と何事もおぼえず
と云、此土の下へ入らるけり、はおぼえず、あ名を何と云
し法師ととへは問へとふつとあらずとり、今いかいかな
けなる若り水、庭よりせんとさしと養ふに、是の
おのがささとして急ら守さして佛の教のありし事
のこそかしかく土の下へ入て、鉦打ならす事、凡百餘年ある
べし、何のしるしもなく骨のこ留ありしは、あきやしき有
様なり。母乃自いかりて覺悟あり、あて年月大事と子の
財宝をぬすくして三施をさして、いとめし、いさつ、收裡に

念珠

そかをか胡

箇

なりカヤカ

道をもいされしよとて、子の物し、是の間で、日くりのさかま
うその外、野山のあり、ひして嫁あり、子に手ひかれ、すろこ
ぶし、一族の人、よもよく交り、めしつらふ者、た心つけ
て物をりし、何へつれ、貴しと聞し、事も忘れ、心しつ
か、暮するのうれしと、時人にかり、出てうれしけ也
此不り出せ、男は時と腹たし、目いとうと、物り、小定に入
たる者、せとて入定の定助と名、なて五とせ、けり、こつに在
し、此里の貧しきや、あ何の方へ、智入て行し、なり、盡い
いくつとて、已あすても、かゝる交り、はする、き有ける、さ
てもく、仙因のおのあり、こあるし、尺ぬいとて、一里又鄰
の里、こもひひさやめ、ほとに、法師い、いりて、いつたり
るや、とソレ、何せ、おし、説法す水と、濁くや、り、少く成ぬ

日記

二世の縁

有し時意し又さきの男今一度出かへりこよ米寄肌かく
す物も定しからんとそ人うれむうしこるましとをるとな
んといふうしき世のさまうこそあれ
(二世の縁 終り)

天童業、此の童宣保二年十月の序文ある倉津の浪人三
坂大彌太の著「老娼茶話中入定の執念」と題せる物語と
同日の談にして、そのは承應元年に大和郡山妙通山清
閑寺の惠達といふ僧が入定の際、詣て来れる美女に
執心して成佛しかな、五十五年の後寛永三年に至りて
も若だ魂魄散せずして鉦鼓を叩きつゝある物語なり、

老娼茶話中入定の執念と同談

鐘の音

○第四回二世の縁に就いて
列傳小説史ニ菅村氏の話として嘗て秋成の「雨夜物語」を
見たといふ四方梅彦の記憶を傳へてある曰く
こは雨ふりつづく夜灯火かきたて、獨り文を繕くに前
裁のかがりに鐘の音がすゝに聞ゆるより耳聾と近づ
きゆけば土の下まで鳴れるなりけりさてはいぶかしと
歸り鋏りて掘上げばいつ入定したりけん一人の老法師
の息絶えずありて一心不亂に佛を念じ居たるなりは救
ひ出して浮世の月の心の隈もなく互に物語る様を描け
るものなりとぞ

天童謂ふ、此の雨夜物語といふは春雨物語の變遷とて
梅彦の記憶物語は本巻第四回の二世の縁なること疑無

なり、寛永三年秋八月大風吹て念佛塚の石を根こぎて
吹倒しける、村人供打守り、其内よりこそかきこむ百姓申
しけるは、人よ七魂有りて、六魂からたをけり、一
魂死骨を穿るべしなり、弘法の入定末代の不思議なり
其外の^此僧の及ぶべき事とあるす、幸此の塚を崩し内
を見たりしとしか、尤もなりと手に手にすき鎌を持ち
て石子のけ土をいじり、石櫛の蓋をとれど、棺の内は惠
達髮髭銀針の如く炭の色の様もやせつた、首よりか
いしとせしことを鳴らし念佛申さるりけるが、人形を聞
きて目をひらく、庄屋源右衛門とりし者、惠達は道付
申様、汝決定往生即身即佛の願を遂て、承應の始入定
す、今迄何故と此せし歎念を止めて往生せざる、惠達

申すや、我は備前^{見嶋}の者、七歳より^{因國}大徳寺よ
て剃髮し、十九歳の夏より^{流國}修行して、山に^嶽の
尊き^平佛堂社を拜し廻り、高野へ七度、熊野へ七度、
吉野の御嶽へも七度詣りて、淡路の嶽も亦在地獄をす
りあり見たり、与此世の假なる事をいとい、早
く極楽浄土彌陀の御國へ参らん事をいそごしが、入定
せしむる^砂、此の嶽及び^{日向}の貴賤近郷よりつどひ集
りし十念授くる、教万人押合ひしのみ、我前も進みよ
る其内は十八九の美女群集の人を押合ひ我前もあり、
衣の袖をすくはるりとはなきて十念を望む、我此の折
女よ念をすくはる心有り、定めて此故に成佛を家なる
信と成りし者あるべしとしか、庄屋その折、生残りし

老人と尋らるる。死人申すは其のをり近郷の美人と沙汰
致し、其上後生願ひし候は、米倉村庄八郎娘にあり
と申さるる候へし。今幸存命仕つる、連れ字を給へ
としふ、庄屋其女爰元へ連れ来ふしとしふとや、
有りて一人の古媪をつれ来る、髪は雪を戴き、なごら
ふ乱し、日はたぐれ四み入り、遠は一枚も無く、腰の
二重を曲り、漸く人又助けられ杖をすくむ、坊主が前
より来る候へ来る、庄屋惠達と申は、此媪こそ汝入室
の砌に執念を止めし米倉村庄八郎の娘、万りと云ひし
美女なり、其節は十九、今七十三歳なり、是を具て
愛着の心あらんや、妄念愛執を離れ、早く俤果に至
るよしと示し候へば、惠達此媪をつくりとと眺めゆる

うち、朝日と白霜の如く皮肉忽ち消失て一具の白
骨計残りたり。故に人の執念程おそろしきものなし
とあり。

○第六回死骨の笑顔に就いて餘談
藤井乙男氏編 向秋成遺文(大正八年四月刊)中餘材録ニ
曰ク、秋成の著述を擧げた物の中ニ、御嶽草紙 春日物
語 西瓜物語 秋雨物語 雨夜物語の名を往々見らるが、
御嶽草紙は藤篋冊子と出て居る御嶽さうじ(精進)春日
物語は春雨物語の誤記とるものと疑はるし、西澤一鳳の脚
色餘録ニ秋雨の小説 棧物語を取りて紅楓秋葉話とい
ふ狂言と仕組み又その秋雨物語を傾城箱傳授の狂言と取
組んだとありと、棧物語は江戸の雲府館天守の作秋雨
物語は江戸の流霞堂主人の著で、共に秋成の著作ではない
西瓜物語は誰が言ひ出したのか不明であるが、或は綾足
の西山物語と同材を取った秋成の与ますらを物語一是は

余の命名で元の題名はない一を誰か假し西山物語と書
きとめて置いたのを、草書の類似より誤傳し来つたので
はなからうか、併しこれは臆測又過ぎぬ、雨夜物語もつて
は(前掲第四回二世の縁を就いて同じ)云々
天童謂ふ、此の藤井氏假名稱のますらを物語こそ
本巻第二回の死骨の笑顔とること疑はるし。蓋し秋成
遺文収載のますらを物語とは同構異文なり

め。す。飲

目ひとつ神

第五回

あつま人は夷^五なりうたいのてよむべきと云ふ相摸の
 國大磯人のころろさうふのくしてや都ののりり思ふ
 やとて西をさす。驚いいなりの谷の葉なれともふさる
 音いなりめとや。ありて親よつきてんけとて母の暇をひ
 て出でちり。あつま文明幸福の礼よつきて又かつるべくもあ
 らどとてつとびの請ふれとあつま人の心けりて別れ悲
 しくもあらぬまに送ります。河あまの過書答なく送
 江の國よつてあつま人と故郷の心せらる。老翁の毒の
 本億れこよむおろもあつて探りて見ると水は風が折る
 るともなく大木吹くをれいそふと報てはあまの安

同いあつまの神

檜のつまで
ニ作ル
つまで。茅削
りの角材

からぬ思ひす。落葉山枝道よりついで泥田をわたりす
る如し。神の社よりせある軒をわたり御座りて昇るべ
くもあら分す。へて州たうく苔むしとくも誰やとりし跡な
らん少のき拂ひとる所有枕はこくはと走むおひし色袂
ときおろして心おちあふり。風ふみ明を物の音あつと聞え
す。木末の常をまきりあく星の光とあすのてけくあむし。夜ひ
やうかよ心すこていとくさむし。あやしくくはなる
人あり背たのく手こくとりて道分したるさま也。あまた
つきて修験か柳染の衣の肩むすひ上てらんぬ枝つき
鳴しとる其あとり女房のしるき山神のまきはのまのす
そ糊こはげとらうくと音してあゆむと檜のつまた打と
るあはせいせしとくを見ぬい面の狐也。其あとりふつ

露

かん人。神
ニ仕へる人

つど、土巻

鱧。鱧
ニ作ル

つのは見ゆれど、つきさうひらるあらのぬの是もきつぬ也。
社の前より立並びとら。来とりかん人か中臣のをらひ聲し
て物申す。殿の戸荒らうのひらきと出る神の白髪おひらる
る中又目一つあつと見ゆは耳も切さきとる。鼻者
やなり。白き大うち幕のにお色もそぬとる。藤の無文の袴
是の今さらしとるものをいとらふと似たり。立並らるかん
なま申修験はまのふ統紫を出て都さあり。が又あつと
に使すとてこくを過るこより。御見あけ申さんとて道つ
との物奉りてんと申さる。神とふ。又いつこもと指てきのお
ひふとあはたし。しやうさふ。都の何某殿の鐘舎の君と心
合せてちのき中軍ませんともあるを告聞えとすと仰蒙りて
こく過る鹿の宮むし。一と油と黄とら。出雲の松江の鱧

鱧の宮むし

出雲

酒。酒ナル
二蓋ニ湯
二近ク見ユ
マ、マ、マ

の膽鮮アサヒ水アサヒにすめめしつる。神云この國は無やくの
湖水アサヒせどめらぬて川の物もアサヒ鹿の空つらし
の何や山も水もいづれもアサヒさうらうあつし山ゆき野ゆ
きてめつらしき物獲らるいとく先酒あさめゆなり
量めめしこまりてアサヒ正木つるたすきよりかけ、御酒アサヒ
あつらしアサヒ鹿のこぼれのりしに手よりあさる落葉松
かさ小枝さしくゆらす。昼より明くてそ火の明りアサヒ神の
かゝるアサヒをえあめとおそろしくかしく鬼と猿が荷ひ
かつきてらる酒飲也運するおりのさことあふる。捨命と
りすそ、かけらけさくけ参る。阿いと三ツめいり細め
て五ツめ参らす。神取上てくへきせ一つめしてあならや
し酒アサヒなものは是れめて云いつ。山伏とさす。又あの本の

言

領焼
酒は戒破リ
張るも
酒やまし

根を枕アサヒしとる男ねくささわよくし阿いアサヒつせがとなり
あらため立来りてめすアサヒとくとくおるくしとむ出さ
り汝アサヒいあつめの替よ志すん身ありを宮女とやら九重の内
いみぢれくして鬼の行のすへい高きいやしきなく心すき
おしく歌よくすやんとその林よわかれ野もやとる者のこ
そとくかへれ東の道とも今日とちあふ改りてゆきとを
りす也山伏の袖アサヒつとわけてとくかへるうすやとて御め
くみの物をつらふと社アサヒのうらうり苦衣の破れアサヒひ
くろを取きて肌アサヒあらはせり低きあした駄を中、伊おま
ゆ又提出ていとくアサヒ破れやまおとあやすし今うすひ
三四アサヒと乞てのむ神の左座と足くくしり鬼の角なりと
くる是も思し蓋めらうきて若き若く人なる数おとるへ

阿の神

しとすむ赤きけのまの瓶立上りてから玉や
た小僧おわらひ扇かきつすとのしこも誰かあそびか
ん酒のよりあそびせら給ひさしとて蒸の根干しるさか
みく飲むる是もおそろし若き者よ都又物學はんは今
より五百年のむの也和歌は教ありといつたり鞠のみ
れまへ法ありとてつゝあるま幣あやしくしくもとびる
世なり己歌よりんとならば心と思ふまると轉りて遊べ
文ころいし一い傳へあれ手かく法をつゝへころとも必
よく書る今いぬす人ま道きられとりの國のぬしは探め
とりて裸らぐ代のいつともわ是はあしきとあるし始の
中ましと今あ君さちのまうとて大事と秘めらるり拙しむ
のら夫も君のめ親のめあこいあらで地のれまほらりて

乱れあひつよまら勝弱きは溝がくまらつるも時也と
くかへれ神の教とてぬ何の心もあらず我はすまやうし
あるくさへ耳さわかしく跡のけしきと目とらて過る目
一の神のあゑこひとつとてらして海の皮を見てあふす
此國なりとてこの森百年とありこれたよとらあらきしを
崎とてひ束て物格しなくとむ山ふしのめらこわらふりて
あやうめらす故郷よかへり一人の女とつりつとりか
いので委しくさ問へち打笑ひてころへも酒よきほとよ
すらこころいさかへんかんとして傳おかつきいぬ繪よみ
たるさす也山ありもいさといふ神の扇とりてこの若き
男とあそびく空よちらせり山ふしとらつてつて神
かつりせ空行むとて此あしとて母の前は落来するいなや

月夜にわかれ

壺

津の國へ水たすへおそるしき事物ありしとて願
申さしとておそるしき事物ありしとて願
まて飲むといひしとて願す男の直におるを縁と
さきにおきてあるとて願すおそるしき事物あり
くも人也とて願す世に鬼も出て人との交りも
ておそるしき事物ありしとて願すおそるしき
事物ありしとて願すおそるしき事物ありしと
世にいつるありしとて願すおそるしき事物
おそるしき事物ありしとて願すおそるしき事
おそるしき事物ありしとて願すおそるしき事
おそるしき事物ありしとて願すおそるしき事

津ノ國ハ鬼原ニテ丹波ノ菟原ナリ
宇奈豆ニ宇奈負ノ誤リナラン

死骨の咲顔

第六回

津の國を物語ノ異曲

津の國菟原郡宇奈豆の丘のむかしより一里よく住つきこ
鍬江氏の人のことな多かり酒つらる事をあたはひとする人
多きか中五曾次と云家殊よにきかしく秋いなる春歌の
ありこの前の海にひきて海に神を祀とろかす一人子
あり五藏といふ父の似するまれば宮古人にて手書歌や
文ののこ習ひらとりそ白翅を射たりゆらちよにぬ心た
けくてさりととも人の為なるん事を常思ひて交りるやく
しく貧しきとあはれひて力をそふる事をつとめとするは
とて父がおにきしき子鬼曾次といひ子は佛藏殿とたふ
とて人そのもろに鬼体らふ心ごとて同一家の中

死骨の咲顔

當次が所へいりて事となるを父はいつかりて無やうの
 ものよは茶も飲まずまじき事別に入聲はおしおきてまなこ
 光らせ征しかり又同じ氏人元助と云ふ久しく家お
 ころへ田畑あつうまぬしつきて手つうら鋤鋤をりて母一
 人いも一人をやうく養ひぬ母はまゝ五十ちにたうて
 いとかひくしく女のおさの機おりうまつむきうておの
 かのあまらすままらぬ妹を宗とりひて世のかこち人まで
 母のまわさを手かこさるゝたたま飯かききて夜いとも
 火のももに母と古き物のうりをまも手つたがからいと
 習ひくひい同し氏の入すれに五飛帯にゆさかひいて交
 り浅からぬ物とひつて師とよめみて学ひひきいつか
 物のひかりてたのま一人よかうらひいを母の兄もよま

事に見ゆる

してけり同しそこの人くすし飯負といふ老人あり是を
 いとひのまると母兄は酒つくる箱かたまた来り
 学はかるす梅すくひて他よやとらす市の子の為にか
 のむすあめとりしあへ貧しくてこそおろせ兄は志すか
 まするをわいとよき中とよして鬼當次あや笑ひて云我家
 りは福の神の御宿申し水いあのおさましま若の娘呼入れ
 の神の市心よかありあしとくかへうせよそと掃きよむ
 くと云ふ驚きまて迎出てかきぬて誰かわすてま打橋を
 五藏受てこのま父母ゆるしはなすとも思ふ心あ水の女
 よ我がくせんといひて絶すとひうらと聞ておのれ何神
 のつきて親のまらら若き誓りやあうお思ふ思ふえよか
 さらすは赤まふかきていつこへゆけ不孝と云ふおめれか

作

書物にはなきわたりて亭ありくや。母き、わつらひて
 いのちもあれ父のよきみまかりむりて、つ所やあるまつ
 しき人の家にはありまき。そとて徳の我まへる来たらし
 物語あとりませてそれかかひ絶えりとも。兼ての心あ
 つきを思ひてうらま云べくもあらす。そ有ける。かりそあ臥
 りやまひして物とす。夜ひるあくる朝りそり。見の着さま
 まに甲まかす。母日毎やあま。しうくらうつおひまを
 うて。意は病といりるまやあらん。くすり何あふべきよ
 あらす。五粒をそ来、まんと云やりつれ。其りか。過る来
 うりて、しうらひ無し。款のふけふを思ひぬ。罪業とらに。さま
 のせいらる所。う生れて。荷りつき。夜に繩を。つて。猶るる
 しき。瀬よかりたらん。款のゆるしなき。いそ。あかり。志り

いらす。わ我父のまむ。おても。て。ひの言いたるへ。山ふか
 き所も。まひうら。水て。相むらひ。うら。れ。と。お。お。せ
 ここの母君せうと。方ゆるし。た。あ。何のむく。ひう。あらん
 我家の瘡つて。くつる。あ。ま。父の守り。や。ま。ま。子。養。ひ。て
 財寶。あ。ま。せ。い。お。は。ん。ま。い。我。る。ま。ま。ま。百。年。ま。ま。も。ち。た。ま。ま。ふ
 へし。人。百。年。の。壽。た。も。ち。か。か。し。い。ま。ま。ま。ま。あ。ま。り。五。十。年。の
 夜。の。ね。あ。り。に。つ。い。え。な。た。病。ま。ふ。し。お。お。や。け。ま。に。後。せ。ら。れ
 て。指。く。は。し。く。折。こ。も。な。は。三。十。年。ま。か。り。や。ま。の。か。ま。の。や。ら。ん
 山。ふ。の。く。も。も。海。へ。ま。す。い。れ。い。ら。の。て。世。ま。在。人。と。も。し。ら
 ぬ。す。と。も。た。い。思。ふ。を。い。の。ち。ま。て。一。二。と。せ。ま。て。も。經。な。ん
 ん。お。ろ。ろ。と。り。お。は。觀。見。も。我。を。罪。あ。ま。の。ま。ま。こ。あ。ら。を。ん。と
 也。い。と。く。つ。ら。い。な。ま。今。す。り。心。あ。ら。う。あ。た。ま。と。ね。れ。こ

改訂

あゝ即夢

夢

見事

ろくもよきわてけりあしやあひすともおほきて母の心
のありに起りしころやつとめかきしひるし改訂あま
て山櫛りき入てまをさうに着る剛衣ぬきやりてあ
らうしきに改め牀を火かたりしせすおき出て母をせうと
に思ひしとあつりてかひししく掃ふを五曹心のろ
ろにおりすをそこそうれいれあうの腹に釣し
を遠くはせ清くもてこや是を箒とるを父を帰らんと
て苞直いとまきからかえしと出せ打あしてよんへの夢見よ
かりしはめを鯛と云魚うへささかそとて危丁とり焚又あ
りするを母のいとくあらう小見いふをふきとめく五曹
ハ涙かきしてうけしとて箒鳴し帯よりもすうてくらふ

多露行露

之篇

道の上之露也

詩曰厭浥行

露宜不風夜

謂行多露

言寧以親自

守恥為淫奔

之事也

ありか

こよひはこころにやとめあしたとくおきて多露行露の
篇うへひてかへるを待とりて親立むりへこの柱をいし
よ家なきを親をあらうめ身子ほろあすらうき子が目代と
のへせめかきしておや子の縁いつべし物なきそとておよ
くしきまきいつりおそらし母よりよして先我ところこ
こよぶんへりりめいおひしきつとらうまきおせて後とも
かきしるるし書改いりりらうこころもあすかの子と思
ひて母のつ所へ入る母ならし意見あめやう也五曹頭を
上げいあも中すしき様そあ若き身の生死のまきしす
みやまきかきしからす財寶もほりからす父まきにつか
すしと出ゆらんかあかなきと思へばたふ心をあら
ふめらん罪いりるも教しへばと云つらつよまこら也

多露行露

母よりとひて神のむすびたまふ縁あらいついのありせば
るべしとなくさあつて父よかくと申いつたり若めが言
入へからねど酒の長が腹やみしてすへたり臥しり蔵
中其のまよぬおのれら月よあわさく入あが米酒と
りかす下ああさ度そやきてえあらあえあらめて後
よ長が腹やみを供りすこの男あつて一日は何はの
りの費あらん今さういふと送あし子承りて後さうつ
けすし片時さえめりてあは後と申法さめの物似あ
ひし福の神の御仕ませりけふをさしめさく春のつ
いうちまてい物ふあとも利一とゆるそとさあらうそ
かしのさあらの山やふくの神とちた逃りささあらうん
とてほあのみまあしへまうある此ついでさうあうかの

か部をよは書物とりしものかくつて夜と油火めり
て無やくのついえすは是も福の神のさうむたまふと云
古買は損すべしもの高入りて價を親のしとぬ
志りや何かするあうとに似ぬやおよ子といわいおのれ
とのしるなまも此後さけさありぬとて日ま法さあ
のすそたのくかくけて父の心をさるほもに今さうふくの
神のみ心よかるあうとさうさうさう。彼のむすあうか
たうはおとつれ絶ぬるあうにやあひおすく成てけらあ
かと母見けるけきて五男よみそかの使してまらゆ意て思
し中とてとこりねともあそれえさすしてつかひし
とよまていさき集りりおや子とむさひて云いかくらしと
思ふたからさうし事と後のせたあわいりさうをさう

此の御記

後

はらのまのれいたる此あし我いへよおくりたまへ子秋よ
ろつ代へともたつる時とりよとら同し夫婦なるそ父母
のまへまて入まきうらんそあてぬがふなりせうとの
御心との申しくそのひてと申元助いふ何事も仰の
まににうりおとすべし清宿の事よくと待たまへとて
がちとひ顔なり母もいつの門出ぞと待久しかりしを
ときして心おちする感とて是もうららひのまおひして
兼い酒あつてあつてまいつらふ盃とりて宗にさすいとう
れいけりて三九度とまき元助うららひの鐘きき
てれいの門立ちぬらんよとて五藏のいぬ親子三人らよ
此の月の光が何あそむかりあわす夜明ぬれぬ母志らふ
袖とて出て打きせ髪のみくれ小櫛うきせ我もわらひむ

かしのうれしと露あすれすそあるかしこにまのりやいた
父のおよししきをぞく心とれ母若はあよいと不
しきたもひてんとてがうなむとりうららひて駕よのるや
て萬をへもく申元輔麻也いも心して刀あきせし横
いへ又五日といふ日はかへりらんふありに言長しと
て母をせしうぬらんむすあそむ感みさかえてやうて又
参らんをと駕よああせうれ行元助とびて出れぬ母は門
火とてそこれいけなりや一つうふ二人のものを貸みうあよ
かうりあふかくても清う入とらまわあれもつきうひ
て銭いづきまきうにの餅と腹うらんと思ふまたうらよ
さてけまの朝けのそおりにうらふよもんるかの家はな
ひあうけまらあうと何ものやまひとてうらまら御

元輔の言

六

五蔵の霊

鬼の口の前
二普次ノ三
字アリトシ

むすめありとも兼て濁らるるともあやしきこと立なすむを
る元助普次の前正しくむすむて妹ある母の五蔵どのの
思ひ人なり久しく病つかれありこゝ入いりきてんとお
かふまゝにつか来りぬ日めらうしやかつきとらせたま
へと云鬼の口ありけりけり何事をも云う妹が我子か
目かけしと云事まゝいやはつよくいさめて今は心も出
夫地のれ等まゝぬのつきてらるふいとて膝よく直し目い
わらして帰れぬとすは我手も及ばず男とるに憐れら
せて追うらんそとておそあしゆなり元助打あらしめて五蔵
よひらよとくむかへらんとして月日をおろるる病し
て死ぬまにせめて此家の庭に入て死なんとぬあふまゝに
つか来らるなりこゝにて死なば此家の墓とならうては

れいの物
金銭ヲ云フ

五蔵の霊
したまへ
言不足歟

うふれれいの物をいふは知りしる故に此いへの殿
費りしとせと金三ひらこくに有是とせかろくともそりを
せあふまゝいふをとり上りてかぬ我ふくの神のこま物な
れど母のれが家まけりれこゝ何せんもとよりよめあり
あらす死人有るはとくつかいぬ五蔵いづこよをる此けの
らほしきまらぬといふよくはくはくはすは母のれも違う
たん親とせとる罪目代とのように入中とより行りせんを
て来らるるすくま立蹴り庭まけおろしたり五蔵いづこよ
もへ此の女我つまなり追出されいづこより手とりせぬん
と兼て思ふしよかはやさるこのあしきなりいさよひてま
とりて出へくす兄かりよ一足ひきこけたをへし汝かつ
まなり此の家まで死ぬへしとて刀ぬきといゆこゝか首切

性

おとす。五書とり上げて神のついで涙も見せし門を出て
 んとす。父おとす馬よお上。おのれ其骨もちていつこ
 りか行。我おやの墓よをまあん。年ゆるさ。うれあて
 とあらす。見ぬ人ころ。おほおひを。罪なをれおとす
 いそき。おとす長の方へあうせま行。長きうて。いかなる物く
 るひくる。元輔の女は。と。野遠からぬは。進行てかく
 く。元助は。息あひなり。と。息あ。てり。母。い
 ちの。機まの。かりて。布おひ。る。が。ま。て。しか。つ。う。ま。つ
 り。よ。う。う。う。う。水。お。と。う。う。う。う。よ。く。こ。を。お。う。せ。た。ま。ふ
 と。て。お。り。来。て。あ。や。ま。ひ。中。長。又。こ。水。も。驚。ま。を。鬼。は。お。ね
 て。夢。次。が。年。と。思。い。ま。此。母。も。鬼。あ。なり。角。よ。く。か。く。て。さ
 し。月。あり。し。と。と。て。外。出。て。目。代。う。う。し。お。す。れ。ま。ち。人。こ。の

してらへて。石のれら何ぞを。一。と。を。ま。あ。り。か。う。元。助
 は。妹。な。う。ら。く。ころ。し。水。の。う。に。と。と。出。て。五。書。も。問。た
 だ。す。へ。お。ま。お。こ。に。さ。う。お。う。と。を。ま。た。ひ。と。お。よ
 つ。な。う。れ。う。り。日。頃。十。日。け。り。て。人。こ。め。出。た。う。し。つ。る
 に。夢。次。の。罪。な。あ。り。似。て。罪。お。も。し。み。あ。く。ま。お。の。ち。心。の。小
 う。ら。あ。や。ら。わ。る。う。は。出。う。り。家。よ。う。り。を。水。や。あ。て。御。つ
 み。う。け。ま。は。り。を。行。む。ん。元。助。は。母。の。ゆ。り。し。る。身。な。れ
 の。罪。あ。れ。を。罪。か。ら。し。是。も。家。よ。う。り。を。れ。五。藏。か。心。いと
 く。あ。や。し。され。と。せ。あ。う。ま。う。あ。ら。す。と。と。お。ま。ひ。と。物
 の。追。入。し。う。り。五。十。日。と。あり。あり。て。國。の。守。れ。な。ほ。せ。了。び。た。ま
 の。れ。此。子。と。く。五。書。と。夢。次。か。罪。の。お。ら。る。此。里。の。居。ら。せ。し
 たり。今。う。追。ま。し。う。と。と。て。この。御。つ。り。い。か。め。く。取。り

こゝれ親子はとまりの顔をかひきて追うる水て行元助の
母とともにあかまりし事仕出されは、このまゝにはをら
ず、西のさのびきて追やうとて事なみぬ。善次が家の
たのらふくのかともにおちやけよめ、おちれらる鬼
善次をすりし事を上げをらひなくさやいともみらうし。
五藏ののりよりてかく罪なはらへはとて引ふをてうつ
くとももさらす事ころのまゝにとしよ。にくししとて
こゝかしこ。血をせしり、里人等つとひ来て、弟てにく
めし物なれば善次はとり放ちて五藏をたすけらう。いのち
たよはるへともあらねど、あこがはるは死べからずとて父
のまへよをりて面をかはらす事のいりて貧乏神のつ
まじし財寶なるとたれも又かせせしらはもの如くなら

た

族

ん、難波又出て何事かとむらんかん、この子なり我しと
よんきて来なるとつらふらうしつ、立ぬていつこりか行
ゆん。五藏のやのて寝うりて法師となり、この山の寺よ入
ていしき大徳の名とりし事。元助の母をこふひて播磨
ののりの方へし、とてて御嶽とておりに園じ。ねも
機いそた、機い千、姫の神に似たり。善次がつまはな
やの里へかへりて、これもたとまりし事。妹が首のゑみ
いるあにありしとていとくゆ、いゆ水をく皆かり
つらうとて

(死者の笑顔 終)

天童集、此の章建邦綾足の西山物語と同様異曲にして
藤井乙男氏編纂の秋成遺文中に「ますすらと物語」と題し

正音のまゝ

母は

て載せしる作と大同小異なるものなり

春雨物語中 死骨の笑顔異文

文化三年卯月十三日、けふふたつ山の大神の祭りに行
 こせ給へり、又こ、一里ばうりなる山里の圓光寺と
 山寺に詣て侍る、剛室和尚と申す大徳の、大神、駿河大
 納言と申せし昔、遠くありてつらふまつられしが、か
 らぬを乞ひて、この御寺をひらき、住まを給ひしと、木
 立いと深く幾りあり、池の心廣く、滝の音ささやかたり
 うあなれ也、
 御宮居の高き岡の上よひひ奉るとりふと、人々に扶け
 られ、幸ふと上りつゝ見奉れば、この御寺にははか
 る假初づかりたるも、有りゆと、御りてたふとく、死

おろし。
借物のや
がり

それさせ給へり、又室の御内より小御姿繪を懸けられり、その左めきに十六騎の御姿、ともに御いくさ立のかりたり、左の方松平甚太郎殿・柳原武部大膳殿・大久保七郎右衛門殿・島井彦右衛門殿・大久保次右衛門殿・高木主水佐入道殿・服部半藏殿・蜂谷半之丞どの、右の方酒井左衛門尉殿・内後中郎左衛門殿・渡邊半藏どの、米津後三入道殿なり、いづれの所の御陣立ちや、思ふれば間ひもよめず、御おろし寺主かぞらけ取りはらぬ給へり、此座よりつどへる人々の中より、けりより参りたる家より、渡邊源太と申す、齡六十を越え給へど、おろしは歎けしうるに、おはす、酒好き給ひて物のたまへるけはひ、いとかけうか也、此翁の事一たびおせり郷書ま聞

西山物語
建部續三
作

えふれど、今ハ西千とせ過またり昔物語をれば、かくてせりおとすとも知る人なく、我もそのかゝこの目ざまし草を傳へ聞きし時、かゝるおとすも雄も世にはあんならぬと思ひしが、生きてけふたいめするも、齡といふもの、かゝるいぢりなふれ、あな^{奥内}いせし大沢はもとより知る人も、この昔をうりておとすも、此事なましかしき人の西山物語より小事作りなり、さるは、御りやふか人をあやまつり、つづら文なり、もろこしの演義小説、この物語のみ、その作れる人のさるし思ふ、世よとぶあると、やむのその時おとすも、おとすもいぢりなれば、いぢりなれば、是れはやくとこぶべき敷らうありひる

さてそのあきし事、おろろびるは書きたるはびりゆれ
ど、いつよりならぬ語言して、後長く傳へよとも思ふ、
讀み見ん人録言めきたるを推し量りして、又こと人強
りつげより、此家の又さまお家のせりにかありけん
この里より川高く人のおほえとみどかりし家の、時よ
失びて貧しくおほひきさ、けうより多きら皆母乃自ひと
りをおし戴きと、何夏をも御為うは露たるけじとつふ
あつられけさ、又同じ氏人の是に引きたうつて山はぬし
田は多くぬ一つき、中もあまありする家なれば、富は
誇りてなんありける、をのり子一人りてさ、實様にて燕
しき行ひせず、家のあまおころりなきを、父喜びて早く
よき妻あはせんと、ころりかると瀬ごりりかると擇ぶ

程よ、この貧しき家と親しき族とありゆれば、常に
いさかひて遊ぶ程よ、あすの雄の次におと姫とみうかに
物う言ひのけしゆ、母の見あらけし給ひて示さるるに
は、彼の家は昔と遠く祖の住み分たせ給ひて、かづみよ
親しむ助け念ひていと頼もしく、多くの年あまこの世を
経るうし也、今の翁いはいひ人よ、年々富又栄ゆる
よは、我方の貧しきをいみじかりつ、夏のためしども
も大かづに改めて、疎き方よのりてなす、このあわさ
は彼の人のみよあらず、世は榮えんずる人は、必ずしも
ひかぬちけく鬼としく、あましくも色おのが心よ叶へ
るよは親しく問ひかほし、族の人には情しきまなく、却
りて忌む憎むればやと、構へるうかし、ましてうちぐ

よ枝さしわかれつれど、根ざし一つの家なれば、是をよ
き度とはせども、いぬじく恥其へつべきもの也、佐野の舟
橋とく取り放ちて申絶えよかし」といとうおや也。
御教へかこちり侍る、御申す事ききし出でる罪
ゆるさせ給へと、泣くくしひつれど、猶かみ情し
く思ひくはに難ひよゆ、今は教へ頼ひて、強言をば測
りや沈みん木にやさうりぢん、言ひ結ぶとも彼の人か
く許すまじ、只是が思ひやりは有りにとて、兄のおす
雄召しとしかくの度いづ思ふや、大島のからき渡
りして、成るも成らざるを人しそひり寄せよ」といふ、
打畏りて「御心の如く思はずうけ引くまじきた、懸橋せ
んは世の常なごら、もしいかさゆる言はれて恥見んすり

只さし向ひて言ひんは、人ききうたてわらまじ」とい
ふ「いづちゆも計れ、とては喜ぶげりの度あらどに
は」といふ、其親の家のいきて思ひやうに「かろく
の度なんある、中御許しあらんは母喜ぶべし、若さ
者らが心も落ちるん、貧しく育ちてのろづうひくしく
こゝ侍れ、御宮仕への一つは怠るまじく」といふ、翁お
啼きて「か、けろ痛き度也、民ろく一すぢりれ、今は世
を經て疎ろしきのこかは、わらは人のとりださ使はせず
菜摘み水汲みせ、落穂拾はきて生えしとせし者の、おの
うのらやわらの交りしとてきん、筋すらしうて貧しめら
ぬ、又市人の富み榮えする、方々ひひ入水来る此頃を
り、我子のまらいつらごときは、こゝに諫むべし」

さて、塵もつゝ言ひ放つ、**無礼**なり、かくあらぬと
て母のの給ひしよ、さて、強ひても言はず立ち帰りて、
思ふ給ふまじうにぬ夷心なり、をさるる者にはあつ
えん、猶もまじうに教へ給へといふ、**荒夷**をなと引く
べき、かれ富みまじうにわが世よりにはあらず、**吉祥**
天女をいつのせまう宿しまるるや、あつ家は御姫君
と申す黑暗天のつらき給ひまじう、**わづら**も哀へつらめ
あまらるる富人や、さて、**瓜**弾きしておまん、
さて弟姫君して、**し**かつかまなくいふ也、今いたる思ひ絶
えよ、とまん、**打泣**きそのみあるを、**若き**心は世をせ
ばく思ひする、親のの給ふ変をさへ背くは**非道**なり、
日と疎うらば**物言**はざりし昔もかへるべし、おのが心

つづね。
奉公する
こと

を心として、親を昔にめ奉る**罪重**し、**此**世後の世猶
いく世を悲しきもの等、さしなむ人変を思へよ、と、
是も答なく涙を袖におさへて立ちぬ、**か**いこの翁も我
子呼ぶ出で、**親**の心は叶ふまじき、**常**も知りつべし、
あの貧しき者らがあつ、**我**門柱も朽ち倒る、**と**今た
た改めよ、と、**眼**かどくしくささいさむ、**御**心もか
ひし変りてせよ、とて、**了**こ立ちておのが臥戸に入り
て、**心**地ありとて物もくは分、**袂**打被まてはふ慕れぬ、
翁ゆすり帰りて、**猶**かきて在ると聞き、**戸**あら、か、
やり放ち、**この**しれ希よ、**あの**か、なりけり女と思ふか、
都り出て人の家をつづねては、**飯**炊き庭の掃きかどて
あつ、**か**り是ならんものよ、**か**らるるま、**あ**ら、
五

いほふし。
主婦

つひの世もはろの里位ぐさすまどま也、刀自裁もぼつ
り物いもせて、もつしをるいと心あり、猶こすのに言ひ
聞やふと、罵るしく、いほふし立ち代りて、**「御心**
のますぐに矯め直すおどきは、業ねを知りとらうらふらふ
や、いほふし言ひ堅むとも、神の結ぶせ給いぬはいの
よしん、思ひくづを心て身のいづつきとせらん、不孝の
罪かろのらす、とく出で、内外の妻田畑をも見巡れよ
とて、かいらをわくへ上げて出でず、はぶくしよ立ちあ
がりて妻とも行ふ。又かいらの弟姫は母のお前まにどぞ
出で、一度に教へ諭させ給ふ御ことわりの、骨身よりとと
ほりて侍るよ、たぶ鬼としき心のありい子燃やせせ死
ねと教ふるよそ、胸つづれてうつくなく侍る、さくらな尼

見せし。

になりて佛に仕へ奉らんと思へど、親兄の御心も背きて
入るべき道もあらじあなれ今までの念ぞとおぼしなり
て、御暇たまわらばや、只怨みつべきは男の心なり、親
ゆるしなくは一人はいづちも逃げ隠れて、出で交は
る世を待たんとし、猶慰めおめてか、死の易し、ひ
たぶるに頼みてあれと言ひしは、きりあ的事あり、我ま
づ死せん、いほふしなき人の言つれは待たじとて、
深く思ひ定めたるつらつき也、母打守りておほせが、
せうと呼び出て、**「こみ子け物のつきとらうらふ、されど犬**
猫のさまもあらん彼が後の世いとほし、わの翁が心は
常の度也、右内こそいふかひやん、養ふとも捨つると
もいかにもきよく、つれ行きやかこりて妻行へよ

煙、たば
ころろ

とて、思ひ定めそのたまへる、夜よあきらめては物のつき
たりなど人いけん、あしたを待ちて とて、其夜は入り
ぬしぬ
山深かりぬど世離れとる所なりけり、鳴く虫の音松の嵐、
たかむらの風、函ひていと悲しげなり、母は夜中過ぐる
まで持佛の御前、たきくゆるきて、阿彌陀ぶちみりかよ
念じておます、弟姫ひまなき涙の玉をや数へて明らすら
ん、いつを寝さむる鐘の音をけきはせしと、厨は出て
て柴たきほらうす、鳥のやどり立ちゆくあふ、せうとも
起き出でて うまいして心おし とて、煙くゆるせつ、
母の御目さめけ 又繚言もあらん、疾く行かん、か
ちとりよそほへ とこふ かしこ申りぬ とて、白き小

袖の帯結び垂れ、かいら髪長きを解きすべらして、けは
ひよく打笑ひ、母の臥し給ふあつ子供しをみして、い
ざ とこふ、母君え堪へず起き出でて 女はがき家へ娶
らる とも、又其家のをへを戴きて、おのが心なげ世
はなきまの也、たましく親と信との為よ 母のふし、繚れ
なごすろを、烈女とて後り傳へられど、思へ、それ身
さいけひ無きもの、死に迫りたる男だましひまそこ
是に教へられて命おとさん、貞操をかて孝忠またが
ふ罪のろろがす、かく掃さべらるぬ 迷ひ路入りたるは
いと苦しうらめ、さく行け とて、流かけす奥なるが
入り給ふ、せうと 迷ひ路をれど一すぢなり、あふさす
枝折つきてこ とて、さきに立ち出てゆく、誰が家

もまぶ朝の煙軒をもる頃なり、かしこりは今朝みお
やの祭する日なりとて、法師迎へて誦経終る所なり、
かくて入り来たるを見て、家の内より怪しむ、せう
と筋の前より居向へば、弟姫つと添ひてうらまをる何
事すらんといふ物狂いとかおぼすて、けふ召しつれ
しは、此頃よりことわりさまい言ひ聞かすれど、一た
び立てし様よりと砕けしおのあさきおぼふきく、た
た暇たまへといふ、一人木又さより淵より浮ひ出て、親兄
の名を汚すべきやは、彼の庭をたまりて死ぬ、翁許さず
とも男の事と也といふ、すがるさま立つ、母のつき添ひ
ゆきて見苦しむらぬさまたとり行へとある時、弟りて我
來る也、右内いづこよそ、親大妻なりとて、人の子を

犬猫とも思ふ、ころに出ていとまくる由い聞かせよ、
其後ともやうもせん、と云ふ、翁あざ笑ひて、ころなる
者けをとい甲の夕暮らむがけて失せぬ、必ずそこ隠さ
れしと思ひて尋ねもせず、親の心ならずぬ者家は、水車
と思へば、我子も犬猫なり、帰りにとも着ふまじ、この
ふるまひ何ぞぞ、能優ともいふ翁があやつり工む習
ひて、我子うらふるよ、とくいぬ、と、赤荒くまけこ
見張りて恐しげなり、打笑ひて、親も似ぬ本徳の如く
いさよ、たゞ放りて我もとに來るは解るせん、死した
りとも聞えぬは言ふかひなし、今はいりする、と、かへ
見れば、はら死なんとおぼして、いづち知らず出て給ふ
やらん、かゝ時後水てあらじ、御手給けらすは懐の物

おどろ
指

もていさきまうらん、顔ふいころに只今」といふ「其為
よこそ母のつきまゝに行けとほの給ひなれ、ころ、汚さん
御許しなくとも」といふ、さうじと思ひて、いづれの所
なりとも心まあるせよ」といふ「さうば国どくは佛の御前
まゝそ」とて、花つゝ焚きくゆるせらるゝ向はす、手合
せうつくしう居り、せうとうしある立ちて刀抜き放す
を見て、今の驚き感ひつゝこれ支へんとするに、おどろ
二つ疵つけるゝおぢて、しりへすゝみすゝひまゝ、弟姫
りかゝるべは膝の上ゝ落ちろろよ、家の入ゝ道もしかすろ
やと、ころ、かしこゝ這ひ惚るゝせうとは首を取り上げ
佛の御前ゝ奉りおきて座を政め、今はおほやけの御沙汰
を待らん」とて、面の色脚も変らぬ、朝げをひて快く

くひ給へりといふ

里長瀬をつけて、あな、くゝゝ此有様を見とめて、
彼の家は嵐印べく走り感ひ入りて見れば、母は窓のま
に棚機女のおきておすす、まご露知らずこそ、源太殿
こそ物狂ひとなりて、しりかゝるの事し出でたまへりき、
此里のけだめより聞き知るまなり、いづらし給ふら
ん、道理いさそおきて、渡邊の家は昔よりおめいぼく
やろを人たふとみて侍らるゝ、いづらき疵もあはて給へ
り」といひつゝ、慌て感ひ立ちさゝどく、母刀自機をも
おりず、さそはしかつあゝまわりつゝとか、いかにせん
不便のまよ」とて、猶うつ箴の音乱れず、又是をおぢ感
ひて、昔物語の渡邊といふつはものゝ鬼を捕へ」といふ

けふ此家の
源太を指
す

寔に此氏人け鬼もあまきりておけすよ」として立ちあがりぬ。
かくてやむべからぬは、都の可しと所へうたへ出でぬ。
やうて召し給ひて、けふあ終りぬを明らめ給ひ、若く
はやりしほど親のしかせよと許ししるまなり、母こそた
けきよ過ぎたれ、又團次は心強く見るく殺させしは、
我手しそあやめしに同じ、刀許さぬておほやけは参りま
かんづる若のこそあり晴し」として、そのた人屋は撃たれ
たりける、月日経て二人とも罪ゆるさる家へ歸りて、今
は侍ありし都田舎は聞えあひたり、團次の翁いふに聞く
人毎に憎みあへたりけき、けふ此家の人の交りていさう
らやあし心すけなまを見れば、そのおみのありはすまひ
實よりかこり参りつらめと思ふ、猶うけしき事の漏らし

源太の妻

つべし、老がたどくしき筆は又も瑾つけやすらん、
さるはあぢきな御方さかしく言なりけき
けふは又下の御社の御影もり奉りて、ろく過ぎさせ給ふ
日なり、還幸といまあひ奉りて、道草もぬかきつきて
て拜みたいまつる、うたつりつる三位五位あり、手綱
ひかして参りつれり、あを馬も絹笠おひかづかせしる、
是ぞん秘の御影ありと申す、浄あへは神もまた三位
五位鞍轡まらしくしく、あつるは入りの輝き合ひて、
げも紅いろ色のつらまをれと、いみづく貴え侍れ、昔
も拜みつれど、けふこの山里にいまあひ奉るがめづるか
なり、目のかぎり見渡さぬて、廣き路も満ちて立ち
つらなりぬく、源太の事もは、かゝるも猶も参りたり

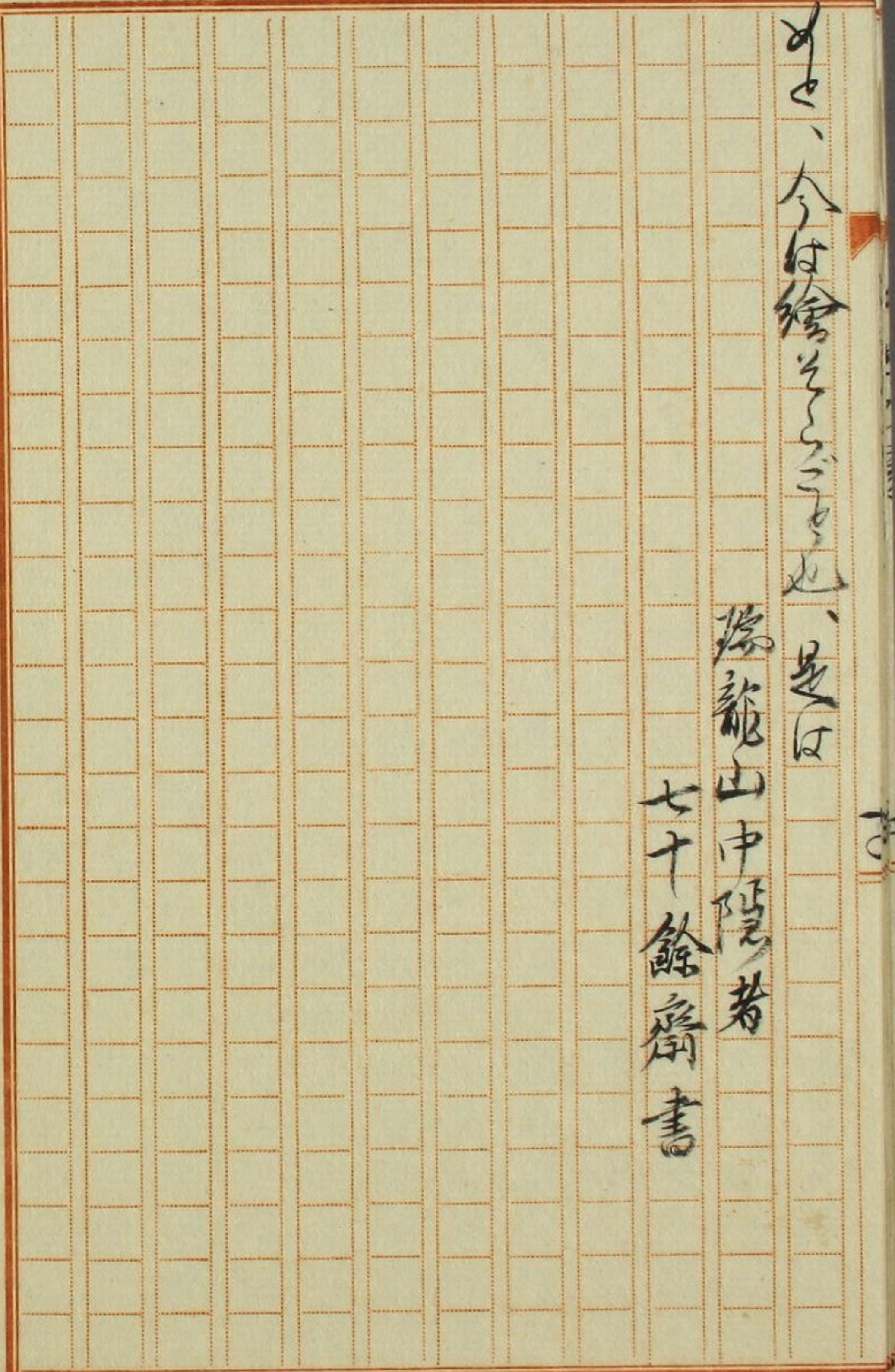
一

昔年の秋
さへ大東や
山地の山を
今更に
飛舟の子
も思ひつづ
らぬ

めと、今は繪をうらなひ、是は

瑞龍山中隱者

七十餘齋書



駕央行

。秋のほすれと比較して見よし

昔高帝の里人といふありけり、おほやけの侍使とて遠
江の國よりさゆき、そのめ(女)の小舞といふは萬よりさか
く飛おほなりけり、いとかなしく相思ひてけり、此處
の侍使は道江美濃尾張を歴て行くべき仰せとてと畏みて
いふに、いづが五日敷なる程、思ひて我より召しつれ
させ給へともふ、いとありけり、人目憚るべし、さるるれ
ば、事つたふは省の座よりゆひ、く帰し給ひん、
ほとて、老いける徒者を是が為る召しつれ、めもをの
らけのさまらやつさせ、敷多が舟より加へてけり、
近江の國よりさゆき、天津の宮の跡たちよりて見る、親お
ほおたちの壽土國より、うからやうら此處の跡に仕へ

連倉山
 美濃守
 佐左連の連
 倉山よりそ
 れが雨ぞふ
 るちふかり
 来吾背
 即ち逆は佐
 波山をふ

絵ひし故りし所を水にとてうに付来けり、いと悲し
 大宮の跡としかは、春草生ひしひきし中々、焼きたる
 し儘や丸やう、かゝりに昔意して、置く露の秋の時雨の
 さ、袖裳結しとくに濡れつ、浪くら山うらうら立ち廻り
 前は倉崎の浪邊の、波空城を打ちそかへるとさふのさ
 びしきしたるよ、只浦洲の鳥の子代々こと鳴くはいかた
 と、妻のさうやまてうば、さかばよ、今の御時よは忍
 びよも待てるま、ま古ごとなるを我おは父達そのぞうの
 の人ともこの都の御為ともび給ひしには、かゝる荒れは
 てたるを見て、海吹く風も骨を沁み通りて、いづくもい
 にしへ惚ぼるるよとて、打泣きつ、歌をなんよみける
 いよしへの人よ我あれや、さう波の古き都をみれば悲

しも

ひと歌う当あつすとや

神樂靜浪之國津美神乃宇良佐備天荒而有都所見者悲寸
 と歌いあがつ、立ちもとほるよ、妻も云ふ、我しと女若
 の年なごう父母の語り聞せ給ひて、かゝるまじきはめ
 終のいといたる悲しかりしには、この御跡一たびはりま
 て見まし、いなひき見てはとさへ思ひ乱れしを、今日
 こゝに来て、このあはれなる事をも聞せ給へるにはとて
 、「いといたる悲しけなる事ありてみるかたすある
 かく故に見しとふ物な、さう波の意を都を見せつ、も
 さすかゝる弱きはあつとむけうりやう、長居をばいませ

黒津
瀬田橋の
南一里

魂のさうひやせんとして、やりくり立ち去る、沖へを見小
旅して物立ちきた、山々のあけのきは舟渡り漕ぐ
みゆ、
あはれなん我上つかさの御舟あまごし、後れてはうて、こ
ころり船もとめて漕がれ行く、堅田の浦に松崎など、ゆ
くきう面白し、日や暮れなるとす、舟路あふぬべいと
悲しい小ど、頼む人よつと恋ひみて、今宵いつこころ心
へば、くろくづ、
我舟は比良の泊り漕きはてし、沖へな行きさう夜い更け
にけさ、
と舟子よあつらく海ゆ、長打思て、さう候ふ、このお

勝野
今大講村と
政の明神と
埒の北うて
御水はみふ
漕をたぐ、

たりの泊り不用なり、あの火の見ゆるは、高嶋の勝野の原
あり、梶枕あびしくおぼさば、かいらに寄せん、彼の野
よいほり、絵へと申す、風波かこりぬば、さうのま
ゝにとて笠の下臥して明けよけ、朝心何となくのどけ
く思ひなりて
磯のさき漕ぎさみゆけば、近江の海八十の渡り田鶴さ
はう鳴く、
東へ漕ぎ渡りて、こうぐり陸路を不破の関山をかぐる、
打越えくれは美濃の國あり、此國の守り言ひ合はするや
かど果して、尾張の國へ越ゆる、砂を渡りをさへいと
覺束るのさしを、は海邊へ来て見渡せば、花まると雲と
波のけぢめなく限り知らぬさう、お代より語り傳へし

あつ海の一め給ふ津國よと、かつ悲しくかつはめづ
らかり、澳へ遠く行く舟の波よさよげら水々をきよ入る
を見れば、かくても乗る人のありひるよと、長き息つづ
あへずと黒うづ又とむ

櫻田へたづき渡る、あゆも鴻砂干め方よたづきわ
たる、

繪うや留まるとあやもがる、小群のいへる、この御歌
のめでしきことつきを思ひいでるは、今の上の伊勢の
國の御幸の時のおほしとて強り感き奉る

吾妹子よあこの松原見渡せば、砂干めかつと田鶴かき
渡る、

と遊びや、又紀の明光の浦よいぞちの津原奉るよと、

春人のよめるとゆきしと

和歌の浦よ鴻ちる水は鴻をさる、蒼鷹をさしてたづ
き渡る、

といふ歌を、人なべてがしとめてさかり給へり、又誰人
のよめ

難波鴻砂干よ三ちて見渡せば、津路の島よたづきわ
たる、

いづれも、御製をばあよ、一心のまづあ州とて承
るは、おろりちるりや、そと教へ給へとさふ、き水
ばよ、歌は物と給ふ時よあうて、おのがあはれと思ふ
子を承く教へいづれば、同じか、あ同じか、あ同じか、あ
まよ、やまよ、誰かく言ひ、うた、我はさし引きりてな

ど思ふは、心まげしや、千々々の花の色、智の赤いいつ
そ愛らぬを、人の心のさうきに曲り鏡みつ、思ひを
深め我勝らんとする程、何てくすめらぬ巧をよへな
し、人をおとしめ我もおひつきをよぶことの悲しきよ、
此情の見候しのみならず、いづこもく遠くも遠くも
打眺むるは何のたごひやある、さる路人のしひさる路
とて、いづの改むや、獨歩人のうはしめきてあひしか
ばくの年と近く是をなん言ひはぬすは、歌のすまのみり
あらん、いづへよふ言盡のさちと逢へる人なりける
うのまありを我は知らず、只蕙の事ふはしく言ひと
りんは、お聞き誰もくすもこそ覺ゆれど、歌いし
ののみならず、さうわらばよ立ちをば、歌ふも水も高

くも聞く人の心をなごきるは、しづめのあしきなり、
言ひすくめ我さうしなりんは、四長山脈のなまきか
きたらひよ歌りしをゆえうたせし、思ひ心なごければ
言の敷もなごはな、猶能うまは返ししを歌ひ、ひ
と歌す心ゆえねは、いづれも詠まらぬ、おろしなり
ともたあく物言はしと思はば、このころわたり常を
るなと、まめ語りしつ行く、
相思は相離れぬ中らひは、うらなく心ゆく物なりと、
死しるは従者の信に聞きよる。上つうさ早くこゝに來て、
萬ふ存らんとして百する、さうてはこゝにて別るべきなりと
て、老人は萬ふあらし人仰きて掃すべくなりぬ。さうは
三河の國を二見とり所なり、ころもつのもある、

妹もあつても一つなつても三河なる二見の道も別れ可ぬ
つ、
女は今更なかりて打泣きつ、
三河なる二見の道も別れ可ぬ、あつても我れひとりか
こを行くの

つみなく、
無事、
ことよくつみなく果し給ひて、鳥の翅をかりても疾く
まゝのぼろき給へと程言いつて立ち別る、わらは姿よ
やつしなれど打振るべき神も欲中しあつて、只顧みつて
遠くなるおどかすみよめるもやうく、因縁もさへりかて
見えずなりぬや、あはれしく若の人は心よりうらなふ
の限りもやつかへしものぞ、おほやけの御使ならぬは
男もわらわしさまうけ旅ゆきせず、さるは出で立つ毎

面白き所も来たり、此浦山のたゞすまひを父母妻子も見
せましなどお歎きとよめる、誠の限りなり、治水も今
のおぼん時にも仕ふる人の私なる草ぶりはせぬよ、民草
の上こころいともうらやます、ある人芳彩の花頭書明
石の月、うらか、この拜ませも、うりも立ちて相離れ
ず行くは、今の御代の春なきを推し戴くべきも、ありけ
る、さうはあささかむ翻の旅路も、おのが病もして相思
けい、白金も黄金もむす何もの、心は世の業を忘れ目
は知らぬ境を見返し、翅あらぬを花もあつたつ、
目毎にやあを改めて遊ぶらん、いとこころ羨しはれ、
行くさくも離れぬ駕の不すまうは、霜の枯葉も鳥の
しく、

誰も若くは人おはると、身におけぬけり言よ打出つる、
かへりては人おはると言よ打出つる。
終り

二の巻抄出

宮木の塚

第八回

本多河辺郡神保の津を皆よりたきおのあつりてつて見
るなり。難波津より入る一舟の又山崎のつくりは、茶を
かちて運ぶ河舟の舟のつくりは、船おちをさる。其又おち
しは、徳名のさるといふ舟のつくりは、この舟より此
は河邊郡とよみ、徳名の川邊と云あるべし。徳名の郡
と名つくへきを、つくりの心えさる。すして、國郡名の
知字と二名のつくりめ、おちと、勅者した、大か、おち、
中、おち、おち、おち、おち、おち、おち、おち、おち、
高人等山河より、酒を、おち、おち、おち、おち、おち、
長、おち、おち、おち、おち、おち、おち、おち、おち、
長、おち、おち、おち、おち、おち、おち、おち、おち、

宮木の塚

一

このやの人

かしくよく

交した

ひねりみて人のこころを蕩がしむと云ふ。されと多くい人び
 むくくる可なりし。昆陽路の里に偏る人ありて是がまの
 め草子のこころ他もゆの正このうやのこころ何守の長若
 と云てつゝの國は今の並みなりきやあれの家あり今の主を十
 太素といひて年のあさ廿四才と云。如き法よき立あるや
 静よる父よむむを專らする詩も作りて都の博士とら
 も行交りほちのあつ人ありけり。この宮本が色よる目と
 ぞめてしつゝ行しかならぬ。母もひ若るほのれ人素
 らんも交しをもめたり。いは宮本も又此君の外は酌
 ころしとていよよくつゝ人けり。長も十太素黄かぬか
 つてんとてよくいひ入るたよあさしひぬく人こいあ
 せむりゆか。此宮本の父は宮吉の何り一敬と云。納言の

い司解け

からきぬ

けし

君なりしからしむの源をわたりて司解人よりさ
 けしむめのとれがしありてこの里はあれすた
 まのまももさあつらひ心かく。何れも何れもてた
 ひし残りなくあひ任したまひしら病もなつてついで
 むあしつあしきぬ母も夜原なる人すて父もつゝつてゆの
 か置のまももさあつらひ心かく。何れも何れもてた
 ついひのまももさあつらひ心かく。何れも何れもてた
 人あれはけしきもてひこもりた。誰子のまももさあ
 しいつきたまももさあつらひ心かく。何れも何れもてた
 たまよよめのとれ云よき人のこころは落る水素てたより
 なくよきをもちあひさ長よ養ひせたらあひし。あし有今
 たらおけしめてせいつら子を人よたまへむのよ

書林の家

河

女子はあまの思ひの長き金あるに思ひて親をちよと
伴をひつぐの長者のめと成し事有つて思ひしよ
と云つれなるも云々のかやと云はせと此子もさう又肌
を思ひくうを今い死んで打なりれめのかい
と後ひこりねよかて手放しし人かゝる時とあつた
しまた涙の淵さうさうして世をまやうせよせよ
たのふちと云所歌はよあといつこも誰もあつたり
にこの神崎の里さうな在りける。長者わきていよほ
て着ひつるに母はあさりてかちち人よおひ立ゆる何
守の色好いほりの人よあすすれと云わとら長か
しこまりぬとて我々の如くかつてさうりゆる春の林の
花みんとて思ひさすれと都すは此項出つたさうき

河

此河

脱宝

△
や
七
に

ありて菟原の郡のいくさの森のさう盛ありと聞て
船の道風なややを水に宮本をつれきて一日遊びひ
の氣ふくれさうさうさうさうの面切のむら幕をりて遊ぶ人
多のよか宮本かかちのむらさうさうさうさう目と倫み
見おこすを彌つてさうさうさうさうさうさう酒つ
しつりさめらうしてあるら十太もけかめはつとあ
けれ思ひほりてせんある。此河さうあり様さ心北より
せりて宮本かかちさうさうさうさう思へるさうさ
れさうさうさう師師か院の若法師さうさうさう酒さ
ろさうさうさう何思けん大さうさうさうさうさ
は遠しあぬめの和田の天の鳥船よ舟子の數あさせて飛か
へるさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

宮本

三

家よりより先人直らきて十太某と云ふ事ありけり
御つゝのころを過させたまふ一夜をやらせたまふ
りつとせ入まきやいととくとも母の御留守守翁か
たしくまきりて何ぞはけむ物と死りてあすなう
帰らす存めの御家と申すは汝り家と申すは
使ら通らぬとてやうてりも在りたまはんと云ふ
事もあるやうに何れぬつづふまらるまらる
ておのれい死して國の大原を忘れしる我が家の母
つぎ病と申すは汝り家と申すはいとげん
即ちんと云ふ老い走りかへりては誰とけり
いと長き息つきて若男越りても飛かへらせよ
寺のそある自在をすつとけひ云すれとすへ
12...25

長か方より使らち来て宿すへきものゝ立止りへ
此也ころはやとて夜こめて任りし
あまの用意申付たまひしかば松とを
かねて奉りし也十太は今めしかへせ
て馬飛せ行過たまひぬとて先十太か
門の戸ひしと竹と釘打とちあり
ありしが心さあきぬとて襦の
と云ふと聞ふ氣城の戸より
侍りてあまのしとてあまの
と云ふと長かまらるこまる
月の汝り殺す水とて水とす
か水遊ぶ今いとりかへす水と
50日いこりて水と云

呵てお入ぬ梅の花の影にありやうと見下しをこの氣は今の
 ちらん
 我いさゝらりたりとてつしみをきき其あした申
 つら御つらし明石の驛より飛敷をらへ来しに汝ら
 里のやまりたかへしよりて馬の足折今の船までつらし
 に下り也 波路の御つらひ人の来りておまをきさうへ
 日のをば罪のまごを記志うすれと又此波つらひの
 ん五百貫の僧尼鞍馬なり此あはれ汝ら里よりつらへと申
 来りり此五百貫の銭たふ今とく又此銭の山家より賜ふ
 ついそとよ是三十貫文也とて取らる運ぶす五十日の猶
 こもれとてつしをす此あはれようやの長廻大夫
 くすし狸肉をつらて祇場より宮本は酌とらせよと云此

ものも馬さとの河さとの河つらおれりなり他の人に
 見えたと此頃おつししものさうとてさしりの間まい
 らすへき便然もあしとて此さすいひはまありぬとく
 て酒のこくししほきめらるるひの帯とらぬと首剣ら
 れつへししきあわの者なりありひおとせかへる宮本こ
 うちまをひて祇の佛を歌いといのちあけさせよと
 おもひしちて十日をりはありしとがま鹿も使つし
 こす長示して云物くはて命もあるよく養ひて出させたま
 ふとあて長の酒志ひのにくきはさしたるおことならす
 神の又又五百貫の鞍馬を買てあはれなま入りと聞やあ
 てめてこく門開りせしと云ふ力を得て經りこつし花
 つし水は焼くゆらせて觀自在ほつさいのるよと十六

宮本は酌

五

鈴虫松虫
夏秋成遺
文安樂寺
人傳(四八)
頁三出ヅ

我長の常務かきまきしは 齡まはくはる君もよき母よめしか
いしすをてそるいしすをていく田の森かつりいつ
らむとあれ物大夫うらつのおろすひ事ありすりしそた
のむべふ人よあろすそんやうし思ひしつより年水と
多しつ病ありしをて出て相見たりけり。甚次法然上人と申
大とこの世に出りて云々の市名をてふと其廣くよと行
へ申すは極樂のいしす事やすしとふたあへるよと鳥
まのやしき老もわのまもた。此市前を考る。後鳥羽院の
めされし上局の鈴虫と松虫と云二人のうらち人ありき
上人の即教を深く信じて朝夕ねぶつし夜中をのり出て
法尼となり庵をすして行ひけるをい高市つりつよく
にくのせしに叡山の法師等佛歌と申して上人を誅ふ先
うた

叡

申

りとして土佐の島山國の流しやうせたまへりまけり上人
の舟舟跡の跡してあすの波路をそのの跡舟めきせ
あふも愛信りして宮本長よ志げしつとをたまへ上
人の市めくち遠く拜むたいやんといふ物よく馴るる
けし一人わりのめ一人そして小舟出たり。上人の舟舟やを
ら岸をそなるに立むらひてあそやのき者すては市念
佛さづけさせし人よとあつく中。上人見おこせたまひ
て今は令捨へく思ひはくこのうらよいかなり。き賤の女な
りとも船のへり立出たりし市聲きよく念佛高らるる十
度なんさつけさせたまひぬ先をつしみて口よそへ申
をとりやがて水と落入り。上人成佛うたりかを波の
底より高くふりて身又入たまへり波りなりとて薄出る

市

二

どうけら言々おとろきまをひて家と走りかたりかた
 んと若く長夫婦つづつはけり走来て見ゆと死中におむ
 くもあしやありて人の若く死場の橋柱こころをてか
 きるといそも舟子ともをこのことかつまよらん此宮木
 か屍の腹よりゆりまをりてゆり上の橋より人呼つて
 つくる屍の権をまめて野つらまよぼるぬ宮木の塚
 のある今に野中まよちてむりてあつらひるむか
 一我此川の南に岸のめん路といふ里に物産のいよめ三
 とせ庵おすひて住りけり此塚あるを問中とむひてやい
 といぬしやの石をまつらう扇打ひらきこらほのまよ
 て塚と云へお路のありやういそあられきて歌なんよ
 むてとむけたりけり其歌

此ノ長歌藤
 等冊子卷二
 下ニ見神崎
 女宮木古墳作
 歌ト題シテ載
 セリ
 又左遊女入水
 と見月光
 大伴付記ト
 添まセリ

うつせいの世あつらあはけつあつまいそつもある
 一 欲高きいやい此功のうもちをかきいものをちこのみ
 の父よわりのてそそ此の母の手もをり世の業い多か
 る物を何しこのも心もあつらあれをやめの様をうけて
 志のりくも名残の浅よよる船のちち枕して浪のむさか
 よりかくより玉藻なかなひおてぬれいれこくもかな
 しくもあるら二このこ在るつへくわいける身の生ると
 もなりと朝がむよういひなけうひさし月を息つぎさら
 しおまいる命もつらくおほほえて此死場の川らりの夕
 一ほめとせらる波を吹かあせお玉藻のむす厚をひひおた
 たりくも過りし娘らあつらつぎをまめてこころにかたり
 つぎ言継けらしこのくへの浅芽のやうに露ふりま志

かりけりだち
 走り

るしの名は...
とやんのか...
一三十年のむかし事なり
(宮本三郎 終)

○天童按ふ、
後拾遺集、
神崎海女 宮城ノ歌トシテ

津の國のなほはの事な法を...
くもけ、ノ歌アリ。思フニ秋成此の宮城ヲ本トシテ、架
空ノコトヲ小夜ニ榮出セシナルベシ

史論ニ秀
秋の不
ミミ遇不
アルトシテ論
ガニ同ジ
又遠文ニ収
メタル駕
行ニ高市
の黒人ト其
歌出ツ

駕奉行ニ
吾妹子にあ
ごの松原ミ

歌のほりあり 第九回 駕奉行

山部の赤人の秋の浦...
たき...
つて秋の交は...
み...
應...
勢...
勢...
又此巡幸...
せし...
尾張の慶...

○後井乙男氏編秘成遺文中の安樂寺上人傳の末節に「
西福寺の長老の物語りて流うせ給ひし、たとく有誰
き和尚の今の世もあんがらる

瑞龍山下 七十五公書

和上も七十には方られしと云

文化五年四月一日しるす(花押)

トアリ。據りてありふに、後春夫氏の序よりい
春阿の物語は西福寺の禪の下張りなりしと朝の
新阿のま水バ、此の春阿の物語りは西福寺に於
いて著竹されしを、其の傍寺より置きしものな
りし。春阿の物語りの成りしは文化五年二月とて、
此の安樂寺上人傳、同命四月なりしと福とすしたる
こと

樊噲

第十回 鉄

題箋ニ奉命
トアリ天保十
四年ノ卯ナリ

つるこ
トアリタシ

全歌巻十回の中第七拾五丸十回撰
此二条はいと詠時多きゆともよみて
詠よしく
さけるるもあらもくしこるるも
思ふもくしこるるもくしこるるも
のつるこしよ心ちつめうきてあ
鶴
假名

天保卯十二月十七日卯分の日には本

昭和十六年一月廿日夜寒中の雷をきく

漆山天童居

平時歳七十前一年

馬車券の切符

櫻

三

同光天字仔六、一五、一七、六

A large grid of red lines forming a table structure on the right page. The grid consists of 12 columns and 25 rows, creating a series of small squares for writing or data entry.

同光天字仔六、一五、一七、六

